

親子関係と子どもの道徳性

—内面化をめざす道徳教育の家庭的背景—

オⅠ部 調査の計画および実施の概要

I	調査の動機	1
II	調査の目的	1
III	調査の内容	2
1)	親子関係について	2
A)	親子関係の種類	2
B)	種類とその具体的内容	2
C)	親子関係診断テスト	3
2)	道徳性について	3
A)	道徳性とは何か	3
B)	道徳の内容	4
C)	道徳性テスト	4
D)	道徳性のずれ	6
3)	家族構成について	6
IV	調査の対象とテスト	7
A)	子どもについて	7
B)	母親について	8
C)	テストについて	8
V	調査の手続と方法	8
1)	親子関係診断テスト	8
2)	道徳性検査	9
VI	調査結果の処理	9

オⅡ部 調査結果とその考察

I	グループ構成	10
II	母子間の道徳性のずれ	10
1)	規範意識のずれと道徳性	11
A)	勤めていない母親と子ども	11
B)	勤めている母親と子ども	12
2)	実践意識のずれと道徳性	14
A)	勤めていない母親と子ども	14
B)	勤めている母親と子ども	16
3)	まとめと考察	17
III	母子関係の種類と道徳性のずれ	18
1)	拒否型と道徳性のずれ	18
2)	支配型と道徳性のずれ	20
3)	保護型と道徳性のずれ	23
4)	服従型と道徳性のずれ	25
5)	矛盾・不一致型と道徳性のずれ	27
6)	まとめと考察	29

IV	規範意識のずれと母子関係	30
1)	勤めていない母親と子ども	30
2)	勤めている母親と子ども	36
3)	まとめと考察	39
V	実践意識のずれと母子関係	41
1)	勤めていない母親と子ども	41
2)	勤めている母親と子ども	44
3)	まとめと考察	48
VI	道徳性のずれと出生順位	49
1)	規範意識のずれと出生順位	49
2)	実践意識のずれと出生順位	50
3)	まとめと考察	51
VII	むすび	53
VIII	資料	58

第1部 調査の計画および実施の概要

I 調査の動機

わが国の児童・青少年の道德性の低下、精神的頹廃に関する論議が盛んに行なわれている。新聞・ラジオ・雑誌などに、一日としてこの問題に関する言葉がみあたらない日はないほどである。また、父母は子どもの反抗的態度・不従順・不作法・乱暴な言葉づかい、自己本位な考え方などに心を悩まされて、道德教育の徹底を学校に要望している。

このような児童・青少年の道德性を高めるために、学校教育の果たす役割は大きいことは当然である。しかし、この道德性低下の問題が、ただちに学校教育に結びつけられ、その責任について語られるところに、検討されるべき問題がある。

すなわち、児童・青少年の道德性の問題を考えるとき、大人の側における責任、家庭・学校・社会の責任が、同時に、並行的にとりあげられていかねばならない。「われわれ大人自身の道德性は、このままでよいのか。われわれの構成する家庭・学校・社会が道德性を低下させる温床ではないか。児童・青少年の道德性を高めるために、われわれ自身にまず改めるべき態度はないか。」という自己反省が、大人の側、とくに「家庭」に求められるべきであろう。

子どもの道德性を高めるために、家庭がきめて重要な機能をもっていることは、あらためて述べるまでもない。この家庭の中で、大きな影響をもつものとして、まずあげられるものは、子どもの心のよりどころとなる親の道德性である。たしかに、子どもの道德性は経験的学習・行動的学習の過程をとおして発達していくものであり、したがって、両親によって示される道徳行動の型（行儀作法のごとく感覚運動的のものから、ものの考え方、価値への態度のような内面的なもの⁽¹⁾）は子どもの道德性の発達に大きな影響を与えるのは当然である。すなわち、親の道德性が高ければ、子どもの道德性も必然的に高揚されると予想される。

しかし、ここで考慮しなければならないのは、親の道德性が高ければ、必ず、子どもの道德性が高いといえるかどうかである。道德教育を構造的に考えるならば、その最も表層にじつげあるいは訓練が存在している。家庭におけるじつげが親の意志どおりに子どもの心に定着し、さらに実践されるようになるには、親自身の道德性が高いことが必要であることはもちろん、親子が望ましい関係にあることが、さらに大切であろう。また、これかあれかのいずれかを選択しなければならない具体的状況におかれた時、状況を正しく理解し、判断して、自己の責任において、いずれかの道を選ぶことを決断するという場合に、親の期待する行動がとられるためには、親と子どもは精神的に深いつながりをもっていることが重要であろう。

親の子どもに対する接し方が、子どもの愛情への欲求をみだし、情緒の安定をもたらしているかどうか、子どもの道德性を高めるための要因ではなからうか。以上の動機から、この研究がなされたものである。

II 調査の目的

この研究は、母子間の道德性のずれの大きさに応じて

ノ) 母子それぞれの道德性の高さは、どのようになっているか

2) 母子関係はどのようなものであるか。

3) 子どもの出生順位はどのようなものであるか。

を調査し、子どもの正しい倫理観や道徳的心情が育てられ、道徳実践として具現するためには、

1) 母親自身の高い道徳性が必要とされるばかりでなく、

2) 望ましい母子関係が成立していることが要求されるのではないか、

という点を追求し、究極的に、

子どもの「道徳性を高めるために、効果的かつ促進的に働く望ましい母子関係のあり方を解明する。」

Ⅱ 調査の内容

1) 親子関係について

A) 親子関係の類型

親の子どもに対する愛情に満ちた態度とか放任的な態度、あるいは、そういうものによって作られる家庭の雰囲気は、あたかも個人の性格がそれぞれ相違するように、それぞれの家庭によっていろいろ異なる。この集団特性については、臨床心理学者は古くからいろいろと類型化している。

しかし、ここでは、この調査を進めるために用いた東京教育大学助教授品川不二郎氏の類型について述べてみる。

品川不二郎氏は、拒否的——保護的、支配的——服従的、矛盾的——基準的という3つの因子に基づいて親の態度をダイア・グラフに示したように10種類に類型化している。

B) 類型とその具体的内容

品川不二郎氏の各類型に含まれる親の態度を具体的に述べてみる。

消極的拒否

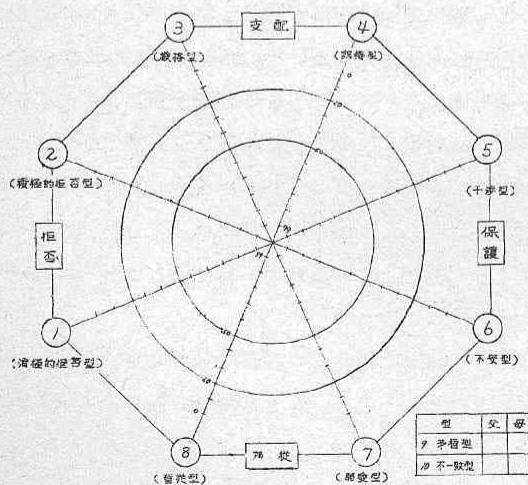
子どもに対する無視・放任・無関心・不信用・悪感情不一致などの親の態度

積極的拒否

子どもに対する体罰・虐待・威嚇・屈辱・過酷な要求・保護養育の責任を放棄するなどの親の態度

厳格

子どもに対する愛情はあるが常に厳格・頑固・強制などの態度をとり、命令・禁止・批判で絶えず子どもを監督している親の態度



期 待	子どもの素質・能力・適性・希望などを無視して、もっぱら親の要求する方向や水準に従わせようとする態度
干 渉	子どもをよりよくするために細々と世話をやき、できるだけ助力や指図を与えようとする態度
不 安	子どもの日常生活・学業・健康・交友関係などに、ほとんど無意味と思われるほどの心配や不安を抱き、そのため必要以上の責任をとり、過度の援助や保護を与える態度
溺 愛	子どもを側において相手をしてやることを何よりの楽しみとし、ささいなことに賞を与え、必要以上にかばってやり、悪いことに対しても味方になってやる態度
盲 従	一切の権力を子どもにもたせ、親はどんな犠牲を払っても子どもの要求を入れる態度
矛盾不一致	ひとりの親が時と場合により、しつけや態度に矛盾をきたしたり、また、両親の態度が一致しないことをいう。

0) 親子関係診断テスト

以上の類型に基づいて、品川不二郎・品川孝子夫妻は、親子関係診断テストを作成した。このテストの各類型には10問題あり、一つの問題は、(いいえ、ときどき、いつも)の三段階に自己評定するようになっている。問題の一つを参考にのせておく。

(あなたは、子どもが話かけても「いそがしいからね」などといつて相手にならないことがありますか。 いいえ, はい ときどき, はい いつも)

このテストによって得られた粗点は、各類型ごとに集計され、パーセンタイルに換算される。なお、このテストの手引書によれば、0～20パーセンタイル区間にあれば、母子関係は危険、21～40パーセンタイルは準危険、50パーセンタイル以上は普通と判定される。なお、パーセンタイルが高いほど、母子関係はより良好である。

この調査に用いられたテストは、品川不二郎、品川孝子共著の田研式親子関係診断テスト(児童・生徒用)である。

1) 道徳性について

A) 道徳性とは何か

道徳性とは道徳心、道徳意識、道徳観念、道徳観として用いられることもあるが、最近では道徳行為が強調されるようになったので、それを包含するものとしての道徳性という用語が、より多く用いられるようになってきた。

したがって、道徳性は社会生活の規範としての法則に一致する心性であり、道徳意識と道徳行為を統合したものであるといえよう。しかし、真の道徳性は、つねに、自己の属する集団や社会の福祉をもっとも重んじ、自己の願望や利益を重視すべきでないともいわれるが、このような真の道徳性は幼少の児童には期待できない。

以上のような見解もあるが、この調査をすすめるにあたっては、道徳性を「道徳の知的理解としての倫理観(規範意識)と道徳的実践を支配する道徳的心情(実践意識)」との二つの内容をもつものと考え、この両面について調査する。

- ・ 規範意識 客観的道德的判断力や知識
- ・ 実践意識 主観的な道德的態度や行動方針。実際の行動に対しては、まだ隔たりはあっても、こちらがより直接的な道德意識であるから、これを実践意識とよぶ。

B) 道德の内容

どのような道德の内容に立脚して調査を実施するかであるが、いうまでもなく、それは今日の道德教育の内容として一般に承認されているところによらなければならない。ところが、この点に関しては今日まで議論のつきないところであって、すべての人を満足させる内容は、いまだに確立されていない。

しかし、文部省の学習指導要領の道德編に示してある内容については、批判はあるが、現在、小・中学校の道德教育の指導内容であり、また、最も多くの人々の同意と理解を得るものであると考える。したがって、調査対象となる道德内容は学習指導要領の道德編に示してある内容に従う。

C) 道德性テスト

この調査をすすめるにあたっては、教研式道德性検査を用いた。それは、この検査における道德性・道德内容の考え方は、A)・B)で述べた規定と、だいたい一致していたからである。

この検査に採用されている道德内容は、指導要領に多少の修正を加えたものであるが大綱は変わっていない。すなわち、指導要領(小学校)に示された4本の柱のうち、Ⅱの「道德心情、道德的判断」と、Ⅲの「個性の伸長、創造的な生活態度」を結合して「個人としての道德」となし、他の2本はだいたいそのままにして、次に述べるような3本の柱とし、そのなかにそれぞれいくつかの具体的内容を、これも指導要領中のものを取捨統合して定めてある。なお、どの内容も、問題から成っている。この検査が測定する道德内容はつぎのとおりである。

	4 年 生	6 年 生
基 本 的 行 動 様 式	1 健康保持	1 健康増進
	2 安全保持	2 安全確保
	3 自分のことは自分でする	3 自分のことは自分でし他人に頼らない
	4 礼儀作法を正しくする	4 礼儀作法を正しく時と場に応じて適切にする
	5 身のまわりを整理整頓する	5 環境の美化につとめる
	6 自他のものを区別する	6 ものや金銭を大切にし上手につかう
	7 公共物を大事に上手に使う	
	8 時間を大切にし時間を守る	
	9 自主性	7 自律

	4 年 生	6 年 生
個人としての道徳	1 0 責任	8 責任
	1 1 誠実	9 正を愛し、不正を憎む
	1 2 誘惑に負けない	1 0 目標達成への努力
	1 3 困難にたえる	1 1 反省、思慮
	1 4 節度、節制	1 2 生命愛護
	1 5 動植物の愛護	1 3 個性伸長
	1 6 向上心、努力	1 4 向上心、努力
	1 7 合理的な行動	1 5 合理的行動
	1 8 創意、工夫をこらす	1 6 創意工夫により生活をよりよくする
	1 9 疑問をもって解明につとめる	1 7 真理の追求に努める
社会成員としての道徳	2 0 よいと思ったことは進んで行なう	1 8 新しい分野を開いていく
	2 1 だれにも親切にする	1 9 弱い人や不幸な人をいたわる
	2 2 仲よく助け合う	2 0 理解と協力
	2 3 だれにも公平にする	2 1 利害にこだわらず公平な態度をとる
	2 4 規則やきまりの意義を知りこれを守る	2 2 自分たちで規則を作つて守る
	2 5 義務を確実に果たす	2 3 協力して人のためになる仕事をする
	2 6 家族の人々を敬愛する	2 4 学校の人々を敬愛する。
		2 5 国際社会の一環として国家の発展につくす。
		2 6 世界の人々に対して正しい理解をもつ
		つ

上に述べたそれぞれの内容について、規範意識と実践意識を調査するわけである。例として問題一つを参考にあげておく。

(社会成員としての道徳)

ロスアンゼルスオリンピック大会で、竹中選手は一万メートル競争の最後にグランド一まわりもおくれてしまい、うしろから一まわりはやい外国選手が追いつこうとせまってきました。そのとき竹中選手は、じぶんの走っている所を外国選手のためによけてゆづったので、さかんなく手を受けました。

問題 / たとえじぶんではできなくてもよいから、いちばんよいと思うもの一つに○をつけなさい。

/ ……………これは竹中選手だけのことであつて、日本の国に関係はない。

2 ……外国人の走る場所をじやましても勝とうとするのがよいことで、
ゆるる必要はなかった。

3 ……外がわからぬくきまりになっているので、ゆるらなくてもよかった。

4 ……ゆう勝者によい記録を出せるようにした竹中選手の行ないは、日
本人のよいところを世界に示したことになる。

5 ……よけてやる力があれば、その分をもっとがんばって走るべきだっ
た。

問題2 ☐ ……あなただったら、どのようにしますか。その番号を一つ ☐ の
の中に書きなさい。

D) 道徳性のずれ

母子間の道徳性のずれとして、規範意識のずれと実践意識のずれの二つの面を考える。
上に示した問題に従ってずれの求め方を述べてみる。

問題ノにおいて、たとえば母親がタを選び子どもがノを選んだとすれば、手引書の配点
基準に基づいて母親には2点、子どもには1点が与えられる。このようにして得た得点を
もとにして、手引書に従い母子間のずれを求める。

なお、単に道徳性のずれという場合は、規範意識、実践意識の両面のずれを意味する。
道徳性の高さは、手引書の配点基準による得点合計によつてあらわされる。

3) 家族構成について

家族についての調査内容、形式は次のとおりである。

		父	母	兄	姉	弟	妹	祖父	祖母	おじ	おば
つとめている											
つとめていない											
学 生	大 学 生										
	高 校 生										
	中 学 生										
	小 学 生										
幼稚園にっている											
幼稚園にっていない											
そ の 他											

- 注 ・ 調査事項については、調査当日の家庭状況を記入する。
- ・ 「つとめている」とは家庭の外に勤めにでていることをいう。しかし、店を営んでいる場合、そこで働いておれば、「つとめている」とする。
 - 各空欄は人数を記入する
 - ・ 「その他」については、店員、下宿人などの同居人を記入する。

Ⅳ 調査の対象とテスト

1) 調査の対象とその選定理由

- ・ 新潟市立日小学校

4年生 男118名 女125名 合計243名
6年生 男132名 女141名 合計273名
- の児童とその母親全員を調査の対象とした。

・ 選定理由

A) 子どもについて

かぎられた時間で、最も効果的な調査をするためには、適切な調査対象を選定しなければならない。このために、子どもの思考、社会的行動、道徳性などの発達段階に関する従来の研究を調べ、発達段階的にみて典型的な特性をもつ学年を調査の対象としてとりあげることが重要である。これは、調査結果を比較検討するためにも欠くことのできないものである。

まず、4年生について述べてみる。

- ・ 思考の発達においては、非論理的思考の時期から論理的思考へ展開する過渡期にある。
- ・ 社会的行動においては、集団集合期といわれ、集団内の成員間には相互の交渉が行なわれ、水平的に結合する。しかし、完全に組織化されているのではなく、すこし強い力が作用すると、すぐ統一が破れるような、まだ不安定な状態にある。
- ・ 道徳判断の根拠・自分のものと他人のものとの区別などについては、小学校2年生の時期と4年生の時期が道徳性発達上顕著な特徴をあらわす時期である。——2年生までは幼児時代の自己中心性の延長であり、2年生から4年生までは、初めて客観的世界にのりだした結果、混とんとした時期である。——

6年生について

- ・ 思考の発達においては、論理的思考の展開期である。
- ・ 社会的行動においては、集団的統一期といわれ、成員間の結合は強固になり、相互依存度は強くなる。しかも、成員の活動は異質化して、地位、役割、分担が発生する。
- ・ 道徳性の発達においては、ほぼ、自律的道德の段階に達する。

以上のような4・6年生の発達段階と他の学年の発達段階とを比較すると、

2・4・6年がそれぞれの発達段階の特徴をあらわす中心的学年となっている。したがって2・4・6年を対象学年とすることが適切である。

しかし、親子関係診断テストの適応範囲は、4年生以上となっている。それで今回の対象児童は4・6年生とした。

B) 母親について

幼児は母親が感じるように感じ、母親が考えたり、行なったりするように、考え、行動し自己を母親と同一化させている。このように幼児の情緒、行動は母親との人間関係のなかで決定されているわけであるが、しだいに年令が進むにつれて、一方ではこの母への依存から独立しようとする気運がみえはじめる。学童期にはいと学年が進むに従い、父母を中心とする家族全体の関係が織りなす家庭内の雰囲気が彼らの心にいろいろな意味をもたらした影響を与えるようになる。

では、小学校4・6年生の児童の親子関係を調査するには、父と母とのうちどちらが、より適切であろうか。

ここでは次の理由から母子関係を調査対象とした。

- ・ 第一は父の不在という問題である。誇張した形でいえば子どもが目を見ましたときには、すでに父親は出勤しており、父親が帰宅したときには子どもはもう眠っているという現象である。こういう欠損家庭に等しい家庭が日本にも多くなってきた。
- ・ 第二は父親の精神的不在とでも呼ぶべき問題である。父親が子どもの目から隠され、子どもに理解されないでいるとすれば、父親と子どもとの心のつながりが弱くなり、子ども心の中心における父親の地位が低くなる。

第三は父親の不在・精神的不在は互いに作用しあって父親の孤立を生みだしているという問題である。子どもにとっては存在しないに等しい父親にかわって、母親が支配的役割を果たす場合、母と子が主存在として結びつき、父親は影のような存在になる傾向がある。

C) テストについて

6年生の児童とその母親には、小学校6年診断用教研式道徳性検査を、4年生の児童とその母親には小学校4年用を実施した。

親子関係診断テストには、両親用と児童・生徒用の2種類あるが、ここでは児童・生徒用を採用し、4・6年生全員に実施した。

児童・生徒用テストを用いた理由は、

- ・ 母親の態度に関する母親自身の自己評価と子どもの評価とはかならずしも一致しない。しかしこの調査では、子どもの評価を重視する。
- ・ 母親に家庭でテスト記入を依頼した場合、母親の多忙・非協力などの理由から、母親以外の人が記入することが考えられ、母子関係が明確には握できないおそれがある。

V 調査の手法と方法

1) 親子関係診断テスト

- ・ 実施期日 昭和37年7月
- ・ 実施場所 新潟市H小学校
- ・ 実施方法 調査対象児の各学級主任の指導・監督のもと、放送をとおして4・6年

生いっせいに実施した。なお、調査者が放送を担当したが、放送が不明瞭であったり、児童が内容を理解できなかったりした場合は、各学級主任に補足説明を依頼した。

児童に配布した親子関係診断テストの回答用紙（調査者作製）に氏名の記入を求めなかった。しかし、とおし番号を記入し、他のテストにおいても、同一番号のテスト用紙が本人とその母親に配布できるよう考慮した。

家族構成調査も、これと同時に実施した。

2) 道徳性検査

調査対象児に対する検査は、各学級主任に依頼して適宜実施し、そのおり、この検査は学校の成績とは無関係であるので、ありのまま正直に答えるように強調した。

母親については、調査の趣旨を記した印刷物を添付した検査用紙を児童をとおして家庭に配布し、それぞれ家庭で記入していただいた。なお、趣旨のなかで、とくに、強調した点は、「個人の記入内容は厳秘にする。かならず母親自身が記入する。」であった。

VI 調査結果の処理

・ 調査票の選別

第一段階として、親子関係診断テスト・道徳性検査のうち一つでも欠けたものは除外した。

第二段階として、欠損家庭、祖父母が同居している家庭は除外した。

第三段階として、親子関係診断テスト、道徳性検査の問題で1問（大項目）でも半分以下の回答のものがあれば、これは除外した。

・ 採点・処理

無答の小問については、道徳性検査、親子関係診断テストとも0点を配した。採点については、以上のほかは、まったく手引書にしたがった。なお、母親に関する道徳性検査の結果について標準化された基準はない。したがって、母子ともに粗点の合計をパーセントに換算し、これに基づいて比較考察を行なった。

第 II 部 調査結果とその考察

I グループ構成

第 I 部・VIの選別基準に適合した子どもは、まず学年、性別によつて類別され、ついでその母親が家庭にいるグループと母親が勤めているグループにわけられた。このような手順で編成されたグループを基礎集団と呼ぶ。この基礎集団は母子間の道徳性のずれに基づいて、ずれの大きいグループ（（L）グループ）・ずれの中位のグループ（（M）グループ）・ずれの小さいグループ（（S）グループ）に分類された。

道徳性のずれとして、規範意識のずれと実施意識のずれの2つの面を調査したが、この研究をすすめるにあたってはまず規範意識のずれを基準としたグループを構成し、この目的の達成に必要な事項を、調査・集計・考察した。ついで、実践意識のずれに基づいてグループを再編成し、同様の調査・集計・考察を行なった。

（L）・（M）・（S）グループの構成にさいしてはずれの合計点を基準として、学年・男女などを統一した区分の設定を意図したが、ずれの大きさや分布にかなりの差異があり、それが不可能であった。したがって、この調査では、前に述べた基礎集団ごとにずれの大きいグループ、ずれの中位のグループ、ずれの小さいグループの3グループを構成した。したがってこの調査で用いるずれが大きい。小さいという言葉は、学年・男女により、その判定基準が異なっている。

以上の手順によつて構成された道徳性のずれの大・中・小の3グループのうち、ずれの中位のグループは、考察の対象から除外した。その理由は、このような道徳性調査においては、被調査者のその日の精神・身体的状況などによつて調査結果が変動しがちであるが、中間グループを除外すれば、一方のグループから他方のグループに移動することは比較的少なく、より客観的な資料となると考えたからである。

この調査結果の記述にあたっては、次の点が配慮されている。

- ・ 内容をわかりやすくするためにグラフを多く用い、詳細な数値は最後の資料編にまとめた。
- ・ グラフは折線を多く用い、（S）・（L）両グループの傾向が容易に比較できるようにした。

II 母子間の道徳性のずれ

第 II 部・Iで述べた基準により構成された（L）グループの母子の道徳性の高さと、（S）グループの母子の道徳性の高さとを比較・検討し、母子間の道徳のずれと母子それぞれの道徳性の高さととの間に、どのような関係が存在しているかを追求する。

したがって、第1図から第16図までのグラフの主な観点は次のとおりである。

- ・ （S）グループの母親と（L）グループの母親とでは、どちらの母親の道徳性が高いか。
- ・ （S）グループの子どもと（L）グループの子どもとでは、どちらの子どもの道徳性が高いか。
- ・ （S）・（L）各グループ内において、母親と子どもとでは、どちらの道徳性が高いか。

ノ) 規範意識のずれと道徳性

各基礎集団ごとに、規範意識のずれに基づいて構成された (L) グループと (S) グループの母子の規範意識と実践意識の高さを検討する。

A) 勤めていない母親と子ども

(グラフについて)

- ・ 縦軸の数字は、道徳性テストによって、各個人が得た粗点を (S)・(L)、各グループごとに集計・平均し、パーセントであらわしたものである。
- ・ 横軸の数字は次の内容をもつ。

- 1 基本的行動様式
- 2 個人としての道徳
- 3 社会成員としての道徳
- 4 以上3項目の総合道徳

なお、具体的な内容については、第Ⅰ部、Ⅳ、2)、C)を参照されたい。

- ・ — (L) グループの規範意識の高さ ——— (S) グループの規範意識の高さ
- ・ — (L) グループの実践意識の高さ ——— (S) グループの実践意識の高さ

第ノ図から第ケ図までを概観してみよう。

イ) 母親の道徳性の高さについて

- ・ 総合道徳では、規範意識・実践意識いずれの面においても、(S)グループの母親が高い。
- ・ 1・2・3の各項目においても1・2の例外はあるが、(S)グループの母親の道徳性が高い。
- ・ (S)グループの母親と(L)グループの母親との道徳性に顕著な差がみられる項目は、社会成員としての道徳である。
- ・ (S)・(L)両グループの母親は、共に社会成員としての道徳性が最も低い。

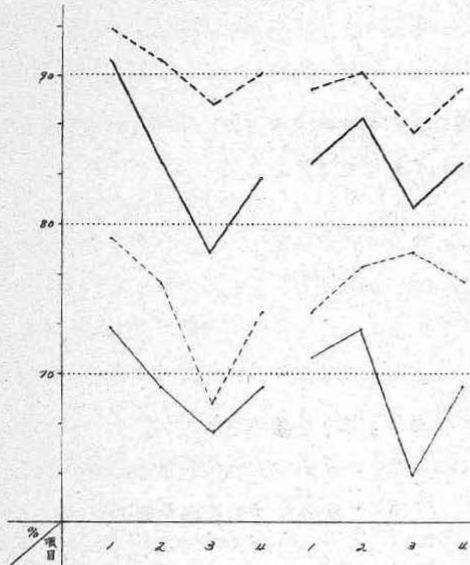
ロ) 子どもの道徳性の高さについて

- ・ 母親と同様に、いずれの項目においても、(S)グループの子どもの道徳性が高い。また、両グループ間に顕著な差のある項目、両グループとも最も道徳性の低い項目はいずれも、母親と同様である。しかし、(S)・(L)いずれのグループにおいても子どもの規範意識と実践意識とのずれは、母親のずれよりも大きい。

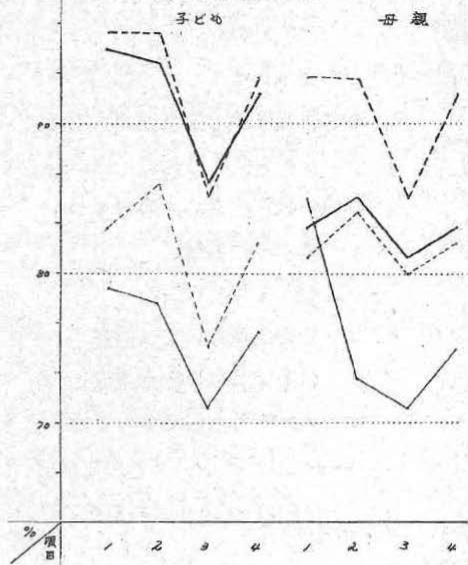
ハ) 母子の道徳性の高さについて

- ・ 実践意識では、(S)(L)いずれのグループにおいても、母親が高い。規範意識については、(S)グループでは、母子いずれが高いともいえないが、(L)グループでは子どもがやや高いとみることができる。

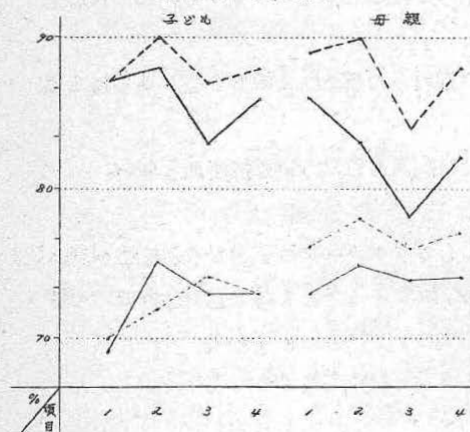
第1図 4年生男子



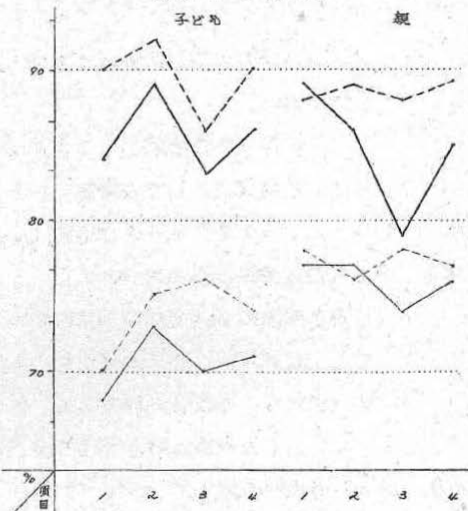
第2図 4年生女子



第3図 6年生男子



第4図 6年生女子



- B) 動めている母親と子ども
 第5図から第8図までを概観してみる。
 イ) 母親の道徳性の高さについて

- ・ 総合道徳についてみると、規範意識では（S）グループの母親が高い。また、実践意識でも、差は小さいが（S）グループの母親が高い。
- ・ 1・2・3の各項目においても、2・3の例外はあるが、全体としては、（S）グループの母親が高いとみることができる。
- ・ 両グループ間の道徳性の高さに着しい差がみられる項目は、社会成員としての道徳である。
- ・ 道徳性が最も低い項目としては、（S）・（L）両グループ共通に、まず、社会成員としての道徳、ついで、基本的行動様式があげられる。

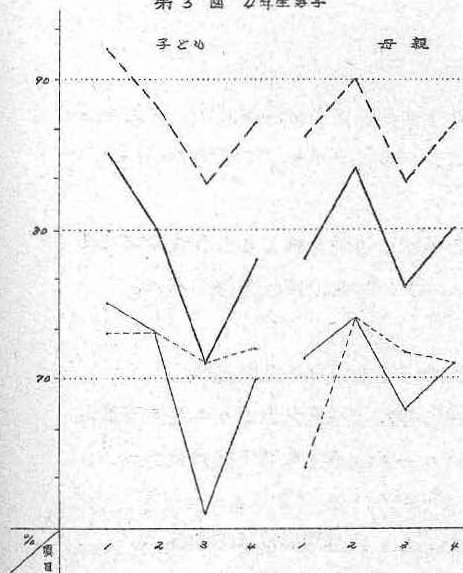
ロ）子どもの道徳性の高さについて

- ・ 母親と同様に、いずれの項目においても、（S）グループの子どもの道徳性が高いとみることができる。
- ・ また、両グループの間に顕著な差のある項目・両グループとも最も道徳性の低い項目は、いずれも社会成員としての道徳である。
- ・ しかし、（S）・（L）いずれのグループにおいても子どもの規範意識と実践意識とのずれは母親のずれよりも大きく、この傾向は6年生に著しい。

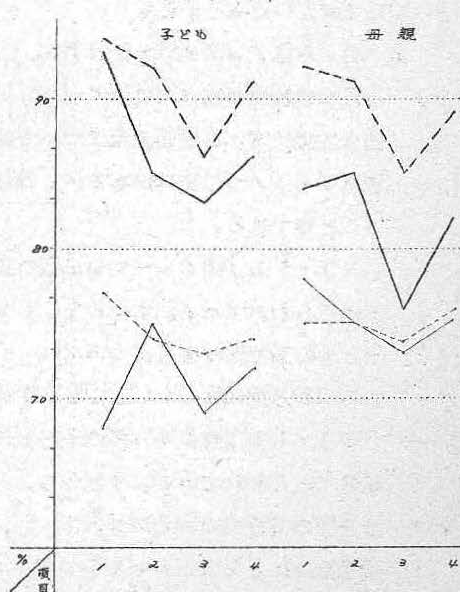
ハ）母子の道徳性の高さについて

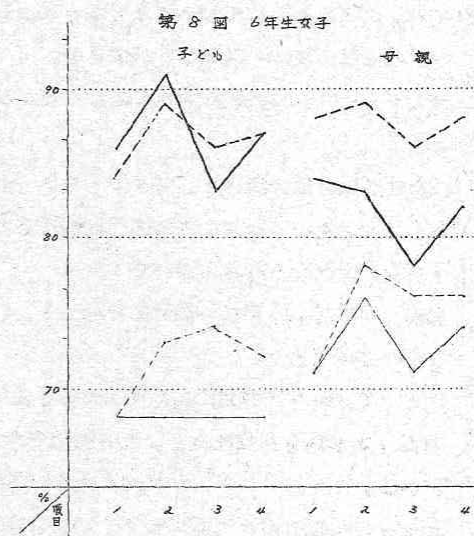
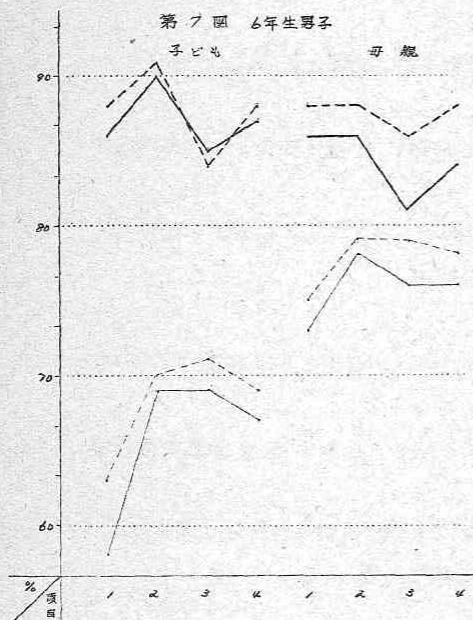
- ・ 実践意識では、（S）・（L）いずれのグループにおいても、母親が子どもより高い。とくに、この傾向は6年生に顕著である。規範意識については、（L）グループでは子どもがやや高いが、（S）グループでは、母子いずれが高いともいえない。

第5図 6年生男子



第6図 6年生女子





2) 実践意識のずれと道徳性

母子間の実践意識のずれに基づいて構成された (L) グループ・(S) グループそれぞれの母親と子どもの規範意識と実践意識の高さを検討する。

A) 動めていない母親と子ども

第7図から第12図までを概観する。

イ) 母親の道徳性の高さについて

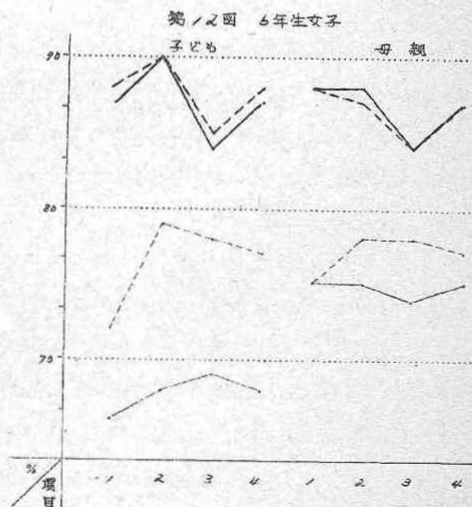
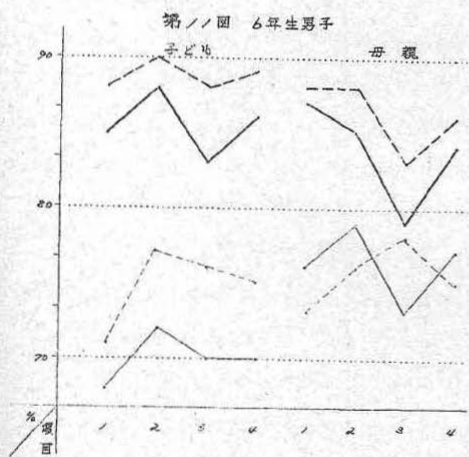
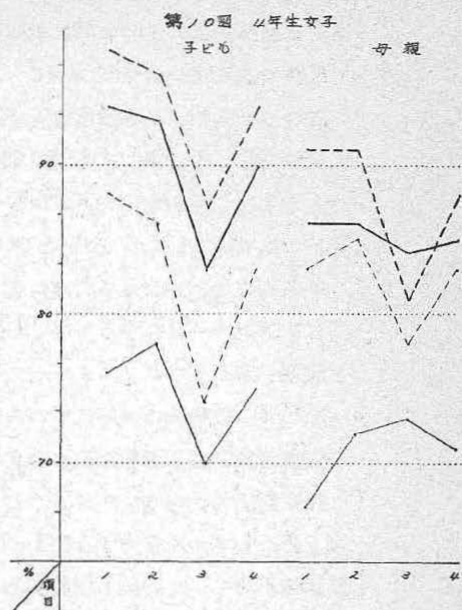
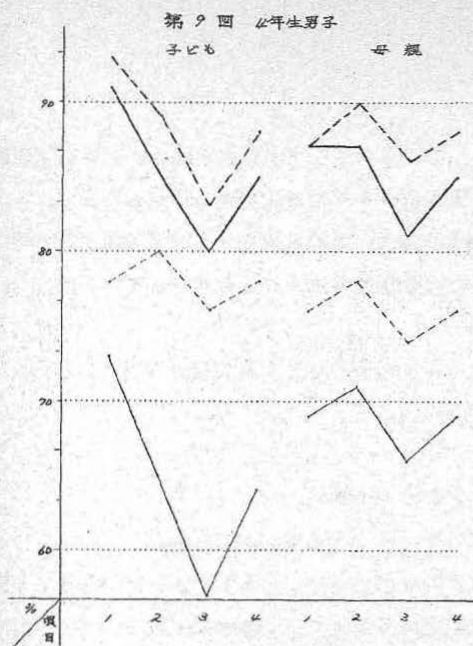
- ・ 総合道徳に関する規範意識については、(S) グループの母親が高い。また実践意識でも、1つの例外があるが、全体としては(S) グループの母親が高いとみることができる。
- ・ (S)・(L) 両グループの母親の道徳性の差は、規範意識よりも実践意識に顕著にあらわれている。すなわち、(S) グループの母親は実践意識が高い。

ロ) 子どもの道徳性の高さについて

- ・ あらゆる道徳項目において、(S) グループの子どもの道徳性が高い。
- ・ (S)・(L) 両グループの子どもの道徳性の差は、規範意識よりも実践意識に顕著にあらわれている。すなわち、(S) グループの子どもの実践意識が高い。

ハ) 母子間の道徳性の高さについて

- ・ 規範意識はどちらかといえば、やや子どもが高く、実践意識は母親が高い。



以上をおおまかに要約すると、(S)グループの母子は、1・2の例外があるにしても、(L)グループの母子よりも道徳性は高く、とくに実践意識に顕著な差がみられる。道徳項目別にみれば、社会成員としての道徳に関する道徳性に著しいへだたりがある。子どもと母親の道徳性の高さを比較すると、どちらかといえば、子どもは規範意識が高く、母親は実践意識が高い。

B) 勤めている母親と子ども

第13図から第16図までを概観してみる。

イ) 母親の道德性の高さについて

- ・ 総合道德に関する実践意識については、(S)グループの母親が高い。しかし、規範意識では、第13・15図のように(L)グループの母親が高い場合もある。
- ・ (S)・(L)両グループの母親の道德性の差は、規範意識よりも実践意識に顕著にあらわれている。(S)グループの母親の実践意識が高いことを意味している。

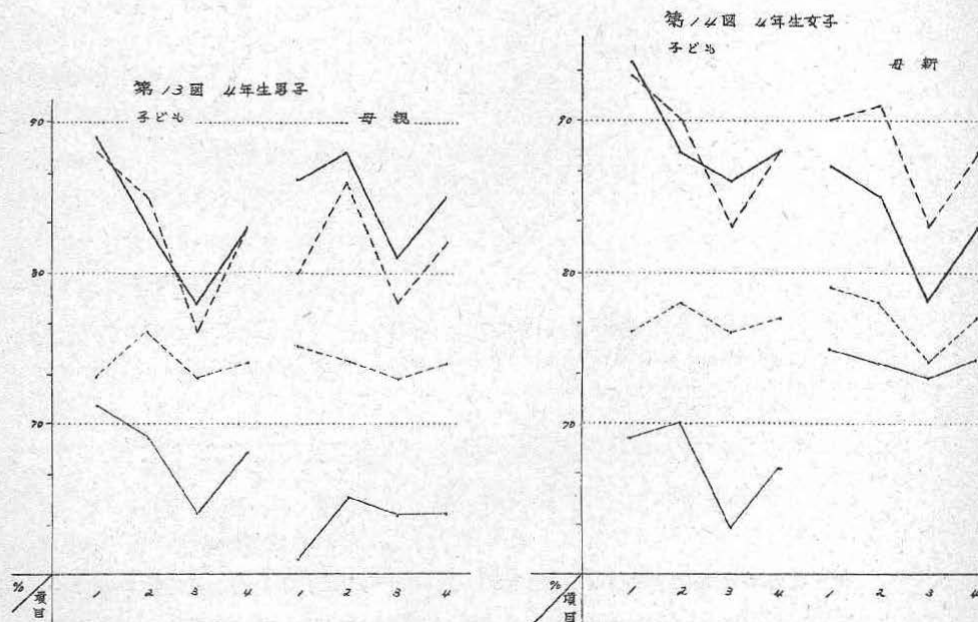
ロ) 子どもの道德性の高さについて

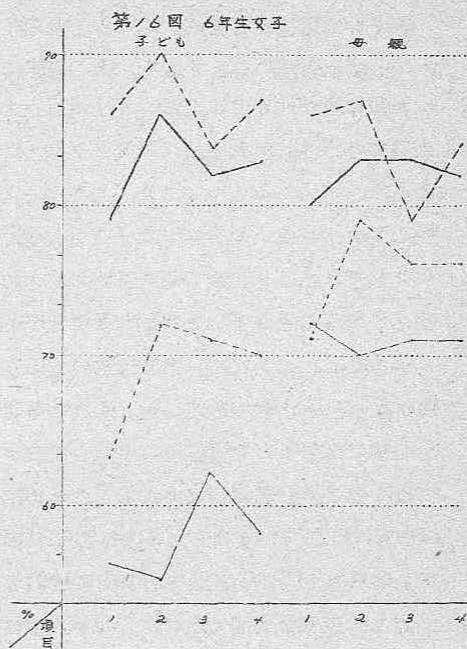
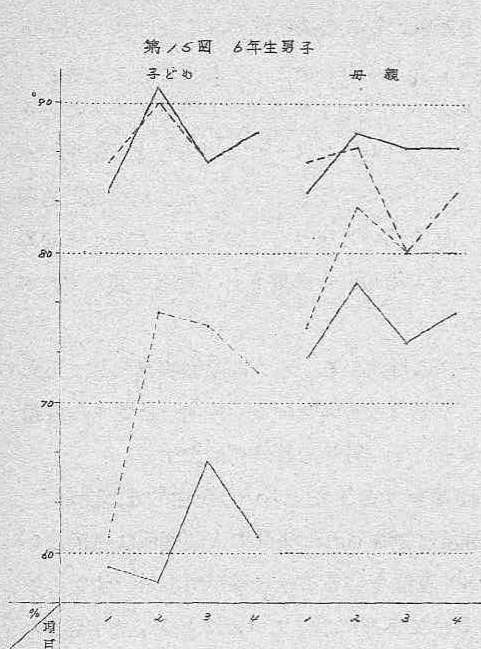
- ・ (S)グループの子どもは、(L)グループの子どもより実践意識が高い。しかし、規範意識の高さは、両グループほぼ相等しい。

ハ) 母子間の道德性の高さについて

- ・ 規範意識では、どちらかといえば、子どもがやや高い。
- ・ 実践意識では母親が高く、とくに6年生では、この傾向が著しい。

以上をおおまかに要約すると、(S)グループの母子は、(L)グループの母子より実践意識が高く、その差が顕著である。規範意識については、基礎集団によつてその傾向が異なるが、どちらかといえば、(S)グループの母子がやや高い。子どもと母親の道德性の高さを比較すると、母親は規範意識はやや低い、実践意識が高いとみることができる。





3) まとめと考察

母親の道徳性についてみると、母親の職業の有無にかかわらず基本的行動様式、個人としての道徳・社会成員としての道徳・総合道徳などいずれの項目においても、(S)グループの母親の道徳性が高いと結論づけられる。ここで、つけられると述べたのは、道徳項目・基礎集団によっては、(L)グループの母親の道徳性が高い場合があるからである。しかし、その数はきわめて少なく、全体的傾向としては、(S)グループの母親の道徳性が高いとみることができる。

(U)・(L)両グループの母親の間で、道徳性の高さに最も大きな差がある道徳項目は、社会成員としての道徳であり、ついで個人としての道徳・基本的行動習慣となる。また、(S)・(L)いずれのグループにおいても、母親の道徳性の最も低い道徳項目は、社会成員としての道徳である。西洋人と比較して日本人は、社会成員としての道徳性が低いといわれるが、この傾向はこの調査結果にもあらわれているように考えられる。

子どもの道徳性についてみると、だいたい母親と同様のことがいえる。すなわち、(S)グループの子どもの道徳性は(L)グループの子どもの道徳性より高く、道徳性の高さに顕著な差が認められる道徳項目は、社会成員としての道徳であり、この項目では、また、両グループの子どもの道徳性は、最も低いといえるからである。

母子の道徳性の高さについてみると、規範意識の高さにおいては、母子間に差はないといえるが、(L)グループでは、どちらかといえば、子どもが高いとみることができる。しかし、実践意識では、(S)・(L)いずれのグループにおいても、母親が高い。すなわち、日常生活において母親によって示される道徳的行動は、子どもの行動よりも、道徳的に

は高いものであることをあらわしている。

子どもの道徳性を啓培するには、その子どもと接触する人の道徳性が高くなければならないことは、当然のことである。この意味において、子どもの心のよりどころである家庭とくに母親の道徳性が高ければ、子どもはそれに刺激され、子どもの道徳性が高揚されることも当然であろう。したがって（S）グループの子どもが（L）グループの子どもより道徳性が高くなっていることも、また、当然である。しかし、ここで注意すべきことは母子間の道徳性のずれが小さい場合に、母子ともに道徳性が、より高いということである。このことを裏がえして言えば、母親の道徳性が高ければ、子どもの道徳性も高揚され、両者の間のずれが小さくなることが多いと推測することが可能である。

さらに、（S）グループの母親は（L）グループの母親より、とくに社会成員として道徳性が高いという事実を述べた。すなわち母親が「不幸な人をいたわる、規則やきまりの意義を知りこれを守る、利害にこだわらず公平な態度をとる、義務を確実に果たす、つねに皆で話し合い、協力して人のためになる仕事をする」などという民主的な態度を、いつもは持っているならば子どもは、この母の態度に刺激され母子間の人間関係は密接となり、母の道徳性が子どもの心の中に啓培されていく基盤を作ることは確かである。すなわち、子どもの道徳性を高めるには、母親自身が高い道徳性を身につけていることが、まず望まれるが、それとともに、母親の子どもへの接し方、母親と子どもとの感情の交流の仕方も見逃がせない重要なことであろうと考える。

この調査では、（S）グループのすべての母親が、（L）グループの母親より道徳性は高いという結果は得られていない。母親の道徳性が高くとも、子ども道徳性が低く、したがって、母子間の道徳性のずれが大きい事例が存在している。

道徳性の啓培の問題は、子どもの全体的内面にふれる問題であり、大人と子どものふれあいの在り方こそ、道徳性を啓培する実質的な心理学的基盤をなすものであり、また中核的要因としてとりあげねばならないと考える。この人間関係のあり方のなかに、道徳性の啓培に効果的で促進的なものと、妨害的で抑圧的に働くものがあると推定するのである。このことについては、次に、母子関係を素材として追求する。

Ⅲ 母子関係の類型と道徳性のずれ

第Ⅰ部Ⅲ・Ⅰ・Aにおいて母子関係の類型として、拒否型（消極的拒否・積極的拒否）、支配型（厳格・期待）、保護型（不安・干渉）、服従型（溺愛・盲従）などをあげたが、ここでは、この各類型と母子間の道徳性のずれとの間にどのような相関があるかを検討する。

Ⅰ）拒否型と道徳性のずれ

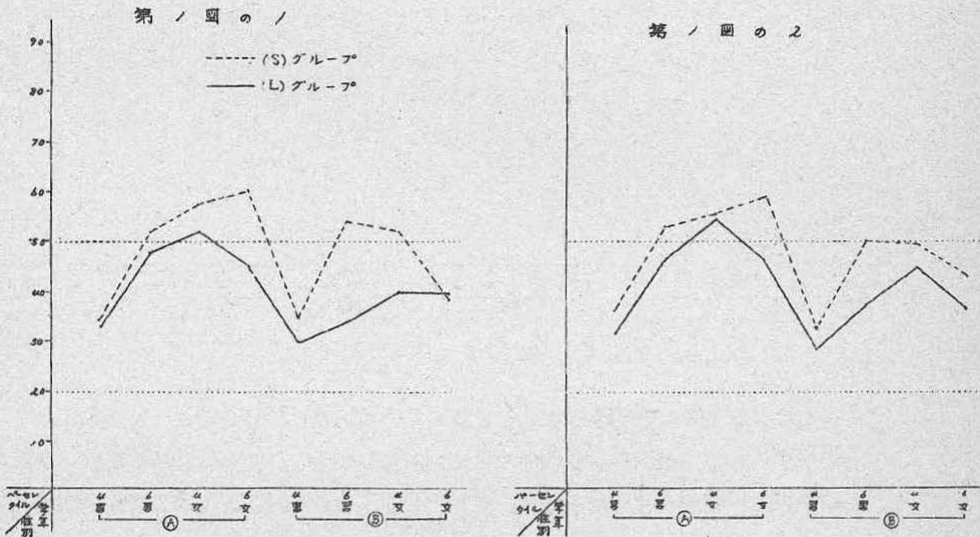
拒否の態度とは、子どもへの愛情の欠除、援助の拒否、子どもの働きかけに対する無視のような態度をいうのである。この場合、愛情そのものが欠除しているものと、愛情があってもその表現に欠陥があり子どもに伝わらないものがある。いずれにしても子どもにとって愛情が拒否されていることに変わりはない。このような親の態度と母子間の道徳性のずれとの相関を調べる。

消極的拒否型（具体的な内容は第Ⅰ部・Ⅲ・B参照）と母子間の道徳性のずれとの関係

は、次の第1図の1、第1図の2に示されている。

グラフについて

(次の第1図の1は、各基礎集団ごとに規範意識のずれに基づいて構成された(S)、(L)両グループの消極的拒否に関する平均パーセンタイル(以下単にパーセンタイルという)を描いたものである。第1図の2は実践意識のずれに基づいて構成された(S)・(L)両グループの消極的拒否に関するパーセンタイルをあらわしたものである。なお、以下に示される第1図の1、第1図の2は、同様な意味を表わす。また、④は母親が勤めていないことを、⑤は母親が勤めていることをあらわしている。)

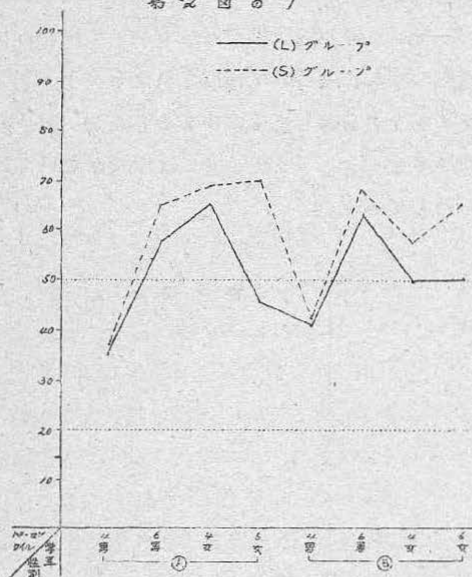


第1図の1によると、母親が勤めている家庭の6年生女子以外のすべての基礎集団においては、(S)グループのパーセンタイルが高い。すなわち、(S)グループの母親は、子どもに対して消極的拒否の態度を示すことが少なく、母子関係がより良好であることをあらわしている。この傾向は、6女④・6男⑤・4女⑥に著しい。

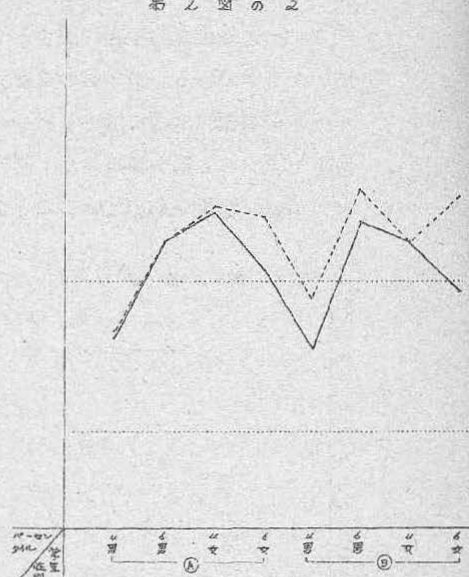
第1図の2においては、④・⑤いずれの基礎集団においても、(S)グループの母親の態度は、より良好であると子どもが判定している。したがって、(S)グループの母親は、子どもに対して無視、放任、無関心、不信用・悪感情などを示すことは、より少ないといえる。積極的拒否型と道徳性のずれとの関係は、第2図の1・2に示されている。

このグラフによれば、規範意識・実践意識いずれの面からみても、(S)グループのパーセンタイルが高く、(S)グループの母親は、子どもに体罰・虐待・威嚇・屈辱を与えることは、より少ないことをあらわしている。しかし、母親が勤めていない4・6年生男子について実践意識の面からみると、(S)・(L)両グループのパーセンタイルには顕著な差が認められない。したがって、4・6年生男子においては、実践意識のずれと積極的拒否態度との間に、あまり関係はないとも推定される。

第2図の1



第2図の2



ここで、母子間の道徳性のずれと母親の拒否的態度（消極的拒否・積極的拒否）との関係を概括すると、「母子間の道徳性のずれが小さい場合、子どもは母親の暖かい愛情につつまれ、安定感を得ていることが多い。」といえる。また逆に、「母親の暖かい愛情につつまれて情緒的な安定感を得ている子どもは、素直に母親の道徳性を受け入れ、ただちにそれを実践に移すことが容易であり、したがって、母子間の道徳性のずれが小さくなる」と推定できる。

両親の拒否的態度に対して、子どもがとる反応として、注目をひく行動、攻撃、反抗行動、異状行動、精神発達の遅滞、消極的・逃避的反応、神経症的傾向などがあげられる。

これらの行動は、「母親の禁止事項をやぶり注目をひく行動をすること乱暴・破壊、非協調などの問題で不良化傾向が生ずること、社会的規範の無視・罪悪感が欠けていること、基本的な社会的習慣が身につけていないこと」などの問題を伴うことが多く、いずれにしても、母子間の道徳性のずれを生じさせる一つの原因になっていると考えられる。

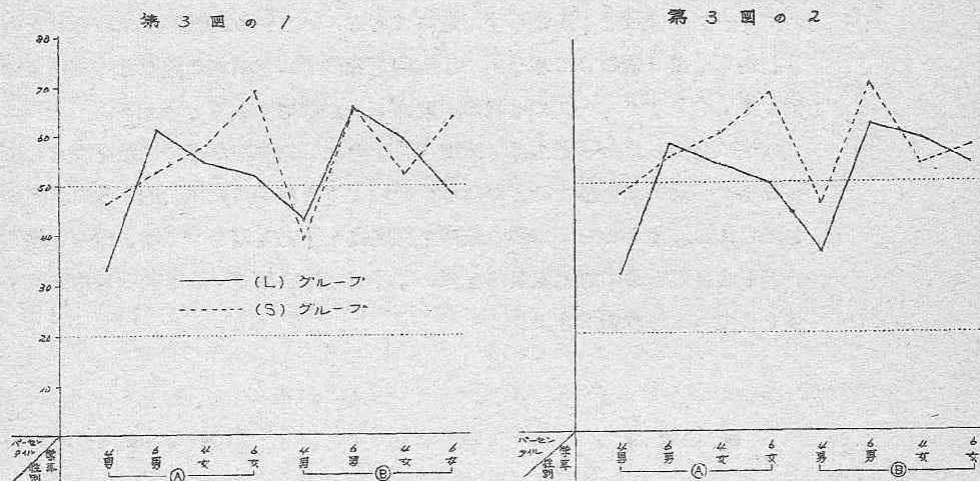
しかし、暖かい愛情で子どもをつつむことだけが、母子間の道徳性のずれを小さくするものではない。これは、(S)グループにも拒否的な母親が存在することから了解できる。どこの母親でも、子どもに対して何かの不満を感じるのは、当然なことであり、軽く子どもを拒否することは、円満な家庭においても、しばしばみられるものである。愛情と反感のバランスを、程よく保つことは、自己中心的な子どもに、家庭・社会の道徳を身につけさせるに必要であろう。しかし、ここで特に強調したい点は、どんな場合においても、子どもが母親の愛情を信じ、情緒的な安定感を得ていることが何よりも重要であるということである。

2) 支配型と道徳性のずれ

支配的な態度は、一般に子どもに対する教育態度にあらわれることが多く、これは厳格・

期待の二つにわけられる。なお、厳格はしつけの面に、期待は学習・成績面にみられがちな態度である。

まず、厳格と道徳性のずれとの関係は、次のとおりである。



イ) 第3図の1・2に共通な点

◎母親が勤めていない家庭

- ・ 4年生男子、4・6年生女子においては(L)グループの母親は、子どもに対してより厳格である。(より厳格ということは、母子関係が、より悪いということをあらわす。)
- ・ 6年生男子では、(S)グループの母親が、より厳格である。

◎母親が勤めている家庭

- ・ 4年生女子では、(S)グループの母親がより厳格であり、6年生女子では、(L)グループの母親が、より厳格である。

ロ) 第3図の2にみられる特徴

- ①・②いずれにおいても、(L)グループの母親が、より厳格である。(6年生男子を除く)

以上について概括してみる。

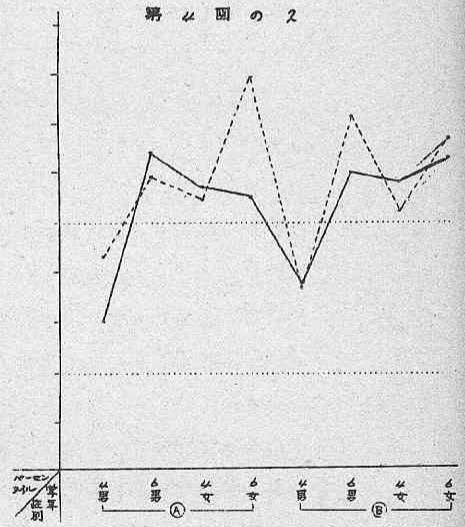
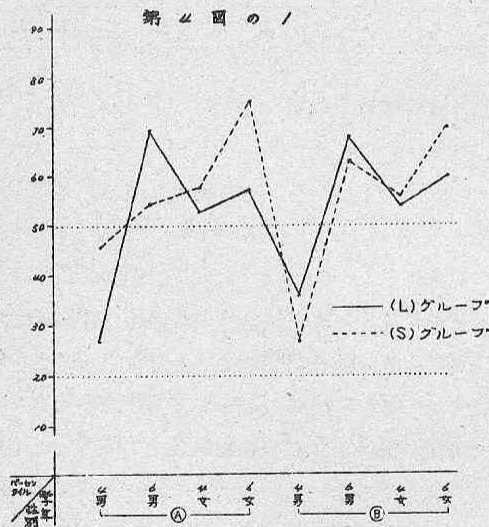
- ・ 母親が勤めている家庭では、母子間の道徳性のずれと母親の厳格な態度との関係は、学年・性別により異なり、一定の相関は認められない。
- ・ 母親が勤めていない家庭では、6年生男子を除外すると(L)グループの母親は、子どもに対して、より厳格な態度をとりがちである。すなわち、過度な厳格さは、

かならずしも、母子間の道徳性のずれを小さくするわけではない。

一般に、厳格型の親の子どもは、おとなしく、行儀がよく、命令によく従い、万事によく訓練されており母子間の道徳性のずれが小さいように考えられる。しかし、こういう傾向は、この調査結果からは認められない。厳格型の親の子どもは、また、親の面前では素直に実行するよい子どもであるが、反面かなりかげひなたがあり、心の中では反抗心を抱いているともいわれるが、この調査結果からは、道徳性のずれの大きいグループの母親は、かならず、厳格であるという一般的傾向も認められない。

しかし、第3図の2に基づいて、実践意識のずれと厳格な態度との関係を調べると概して、(L)グループの母親の態度が、より厳格であるといえる。

厳格に育てられた子どもは、意欲消失、冷淡、無感動などの問題をおこし、さらに劣等感や不適応感を抱くことが多い。このような傾向は、拒否的な親の態度からも導きだされる。すなわち、母親の厳格な態度は、子どもにとっては、拒否と感じられ、子どもは自分自身に対する自信を失い、不安定感を生じ、母子間の道徳性のずれを大きくしていると解釈できよう。



第4図は、期待と道徳性のずれとの関係を示したものである。

1) 第4図の1・2に共通な点

㊦ 母親が勤めていない家庭

4年生男子・6年生女子においては、(L)グループの母親が、子どもに対して、より期待をかけている。6年生男子の(L)グループの母親は、これと逆の傾向を示す。

(より期待をかけているということは、母子関係が、より悪いということをあらわす)

㊧ 母親が勤めている家庭

6年生女子では、(L)グループの母親が子どもに対して、より期待をかけている。

ロ) 第4図の2にみられる特徴

過度の期待と、実践意識のずれとの間には一定の明瞭な相関は認められない。

子どもの素質や能力を考えずに、大きな望みをかけるとか、あるいは、子どもの希望や適性も考えずに、親の果たし得なかった野心を子どもにおしつける態度は、主として学習成績の向上に集中されているようである。したがって、道徳性のずれと期待型との間には、あまり相関関係はなく、これがこの調査にあらわれたとみることもできる。

しかし、期待型の親に養育された子どもは、学業その他の訓練に対して抵抗して空想にふけるか、あるいは、表面の型式だけを整えて現実面から逃避することもある。この面から考えると、(L)グループのパーセンタイルが低くならなければいけないわけであるが、かならずしも、そのような傾向がグラフにあらわれていない。これは、「期待は子どもに対する激励となり、母子の心を結びつける契機となることもある」という理由によるものであろう。

ここで、母子間の道徳性のずれと支配的態度との関係を概括する。

◎ 母子間の道徳性のずれと期待型との間には、全体に共通な相関関係は認められない。

◎ 母子間の道徳性のずれと厳格型との間には、全体に共通な相関関係は認められない。

しかし、子どもに対する母親の態度が、より厳格であれば、母子間の実践意識のずれが大きくなる傾向がある。(6年生男子を除く)

- ・ 4年生男女、6年生女子(母親が家庭にいたる場合)では、母親の態度が、より厳格であれば、母子間の道徳性のずれが大きくなる傾向がある。

3) 保護型と道徳性のずれ

子どもに対して、不安、心配、恐怖などを抱いている母親は、しばしば、その感情を子どもを過度に保護することによって解消しようとする。この母親の態度は、干渉型、不安型にわけられる。

次の第5図は干渉型と道徳性のずれとの関係をグラフにしたものである。

干渉型の母親には、やや期待型に共通した感情があり、子どもをよりよくするために細々とした世話をやき、できるだけ助力や指図を与えようとする。したがって、第4図とほぼ同じ傾向があらわれるのも当然であろう。

イ) 第5図の1・2に共通な点

◎ 母親が勤めていない家庭

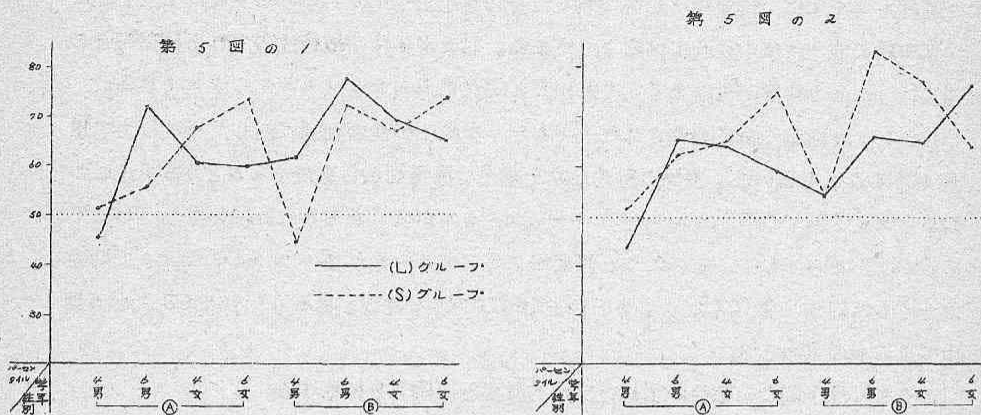
- ・ 4年生男女・6年女子においては、(L)グループの母親が、子どもに、より干渉しがちである。6年生男子では、これと逆の傾向を示している。(干渉しがちということとは、母子関係が、たり悪いことをあらわす)

◎ 母親が勤めている家庭

- ・ 共通点は、みとめられない。

ロ) 第5図の2にみられる特徴

- ・ ④・⑤いずれにおいても、(L)グループの母親が、より干渉しがちである。

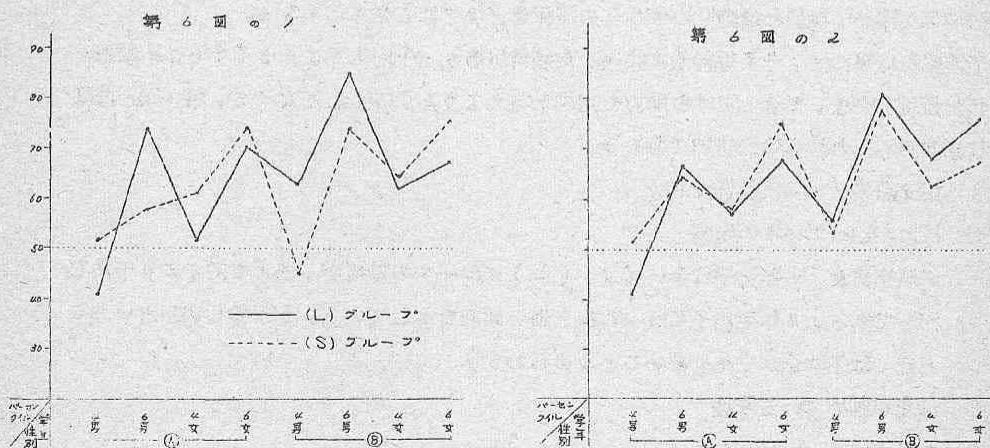


不安型と道徳性のずれの関係は第 6 図のとおりである。

イ) 第 6 図の 1・2 に共通な点

㊦ 母親が勤めていない家庭

- ・ 4年生男女・6年生女子では、(L)グループの母親が、子どもに、不安を抱きがちであるが、6年生男子では、これと逆である。(不安を抱きがちということは、母子関係がより悪いことをあらわす。)



◎ 母親が勤めている家庭

- ・ 4・6年生男子では、(S)グループの母親は心配しすぎる傾向が強いが、女子については、いずれともいえない。

ロ) 第6図の2にみられる特徴

- ・ 母親が勤めている家庭では、(S)グループの母親は、子どもに対して不安を抱きすぎる傾向があり、母親が勤めていない家庭では、(L)グループの母親が不安を抱きすぎる傾向がある。

子どもに対する愛情が欠け、子どもを粗末に扱うのが拒否型ならば、子どもを大切に保護しすぎるのが保護型である。いつも細々とした世話をうけ、日常生活、学業、健康、交友関係などにおいても、過度の援助や保護を受けている子どもは、いわゆる「よい子」と呼ばれ、礼儀正しく、従順でおとなしく、したがって、母親との心のつながりが密接で、母子間の道徳性にずれが生ずるはずがないと常識的には予想されるが、調査結果は、かならずしも、それを裏づけしてはいない。

ここで、保護型と道徳性のずれとの関係を概括する。

- ・ 母子間の道徳性のずれと干渉型との間には、全体に共通な相関は認められない。しかし、干渉しすぎる母親の態度は、どちらかといえば、母子間の実践意識のずれを大きくする傾向がある。
- ・ 母子間の道徳性のずれと不安型との間にも、全体に共通な相関はない。しかし、母親が家庭にいる場合、不安あるいは心配しすぎる母親の態度は、どちらかといえば、母子間の道徳性のずれを大きくする傾向があり、母親が勤めている家庭では、不安・心配しすぎる親の態度が、母子間の実践意識のずれを小さくしている。

一般に、保護型の親の子どもの問題には、「心身の発達が遅滞する、依頼心が強く忍耐に欠ける責任をいつも他人に転嫁しようとする。おとなに保護されたため同年の子どもとの接触がさまたげられ、社会的成熟も遅れ、ひっこみ思案で孤独になりやすい」などがある。

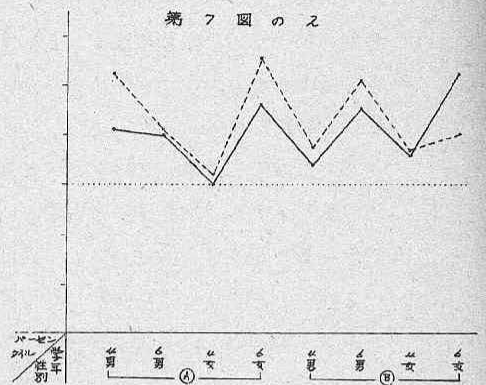
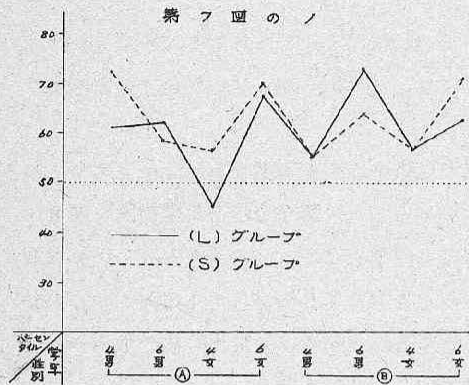
このような問題は、子どもの道徳性の発達を阻害する要因であるばかりでなく、道徳性そのものの低下を意味するものであり、母親が意図した方向から、子どもがそれていることになる。このように考えると、保護型の親と子どもの間では、道徳性のずれが大きくなるともいえよう。

保護型と道徳性のずれとの関係は複雑であり、学年、男女、母の職業の有無によりそれぞれ独自なものになるが、それは、上述のいろいろの要素がからみあっているからであろう。

4) 服従型と道徳性のずれ

子どもの要求や主張は何事であれ無条件に受け入れてやり、そうすることによって満足している母親がある。単に子どもに対する愛情が過多であるばかりでなく、子どもに服従的に奉仕することによって母親の満たされない感情を補っている型を服従型という。この型は、さらに溺愛型と盲従型に分けられる。

溺愛型と道徳性のずれとの関係は、第7図の1・2に示されている。



イ) 第7図のノ・ニに共通な点

◎ 母親が勤めていない家庭

- ・ 一般に, (L) グループの母親が, 溺愛する傾向がある。

◎ 母親が勤めている家庭

- ・ 共通点はない。すなわち, 第7図のニにおいては, どちらかといえば, (L) グループの母親に, 溺愛する傾向があるといえるが, 第7図のノでは, どちらともいえないからである。

ロ) 第7図のニにみられる特徴

- ・ ④・⑤いずれにおいても, (L) グループの母親に, 溺愛する傾向がある。

次に盲従型と道徳性のずれとの関係を検討する。

イ) 第8図のノ・ニに共通な点

◎ 母親がつとめていない家庭

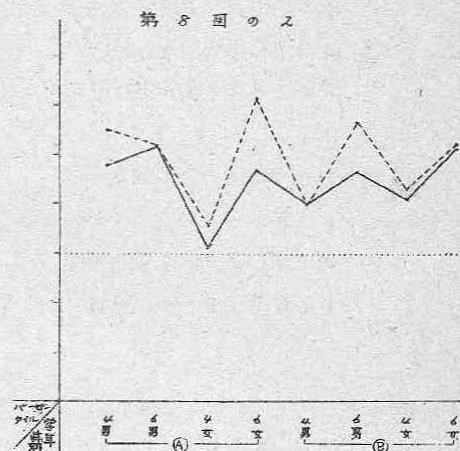
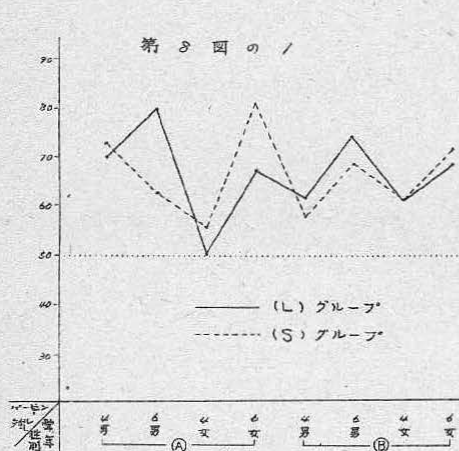
- ・ 4年生男女・6年生女子においては, (L) グループの母親が, 子どもを盲愛しがちである。

◎ 母親が勤めている家庭

- ・ 6年生女子においては, (L) グループの母親が, 子どもに服従しすぎる傾向はあるが, その他の基礎集団においては, 一定の傾向は認められない。

ロ) 第8図のニに見られる特徴

- ・ ④・⑤いずれにおいても, (L) グループの母親が, 子どもに盲従する傾向がある。



以上を総括すると、服従型は、母子間の道徳性のずれを大きくするといえよう。では、服従型はどうして、ずれを大きくする原因になるのだろうか。

一般に、溺愛型の両親は、「子どもの要求をしりぞける毅然たる態度がない。子どもの要求が不相当だと思っても、すぐおしてやる。また、子どもが間違ったことをしている場合でも、叱責したり、禁止したりできない。誤っていることについても、子どもの味方になる」などの態度をとりがちである。こういう親の態度から、当然子どもに予想される問題は、「幼児的自己中心的である。自主性、創造性がなく、依存心が強い、困難に抵抗する力がない、自己本位で社会性や協調性がない。」などである。こうして述べてみると服従型の母親のもとでは、しつけや訓練を欠き易く、子どもは母親の希望と異なる方向へ進み、母子間の道徳性のずれが大きくなりがちであることは明瞭である。

拒否的な母親からみれば、はるかによい母親のように思われるこの型も、子どもの道徳性の発達に、かなり悪影響を与えている。

最後に、調査結果をまとめる。

- ・ 母親が勤めていない家庭では、溺愛、盲従しがちな親の態度は、母子間の道徳性のずれを大きくすることが多い。
- ・ 母親が勤めている家庭では、溺愛、盲従しがちな親の態度は、どちらかといえば、母子間の実践意識のずれを大きくする。

5) 矛盾・不一致型と道徳性のずれ

子どもの同じ行動に対して、ある時は叱責したり、禁止したりしながら、またある時は見逃がしたり奨励したりするような一貫性の欠如している矛盾型、両親の態度が一致せず、た

たとえば、父親は拒否的であり、母親は保護的であるとか、あるいは、母親が支配的であり、父親が服従的であるとかで子どもが両親から異なった取扱いをうける不一致型、このいずれも、母子間の道徳性のずれを大きくする条件であろうと予想されるが、調査結果は、これを証明している。

次の第9図は、矛盾型と道徳性のずれの関係を描いたものである。

1) 第9図の1・2に共通な点

◎ 母親が勤めていない家庭

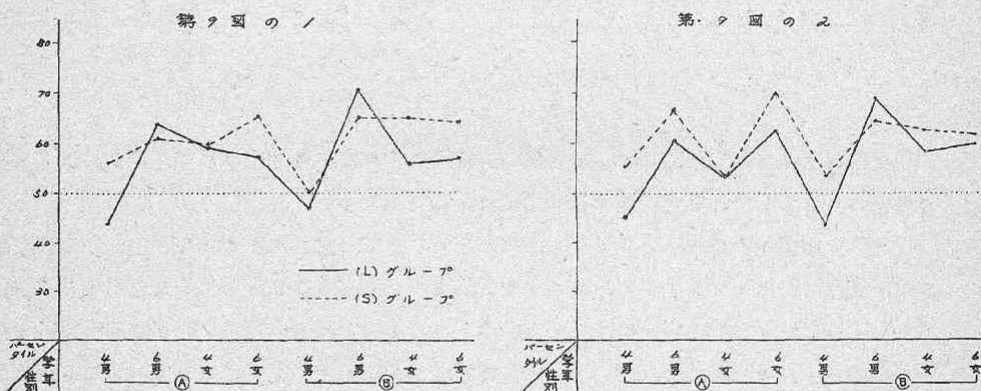
- ・ 4年生男女・6年生女子においては、(L)グループの母親の態度が、より矛盾している。

◎ 母親が勤めている家庭

- ・ 4年男子・6年女子においては、(L)グループの母親の態度がより矛盾している。

ロ) 第9図の2にみられる特徴

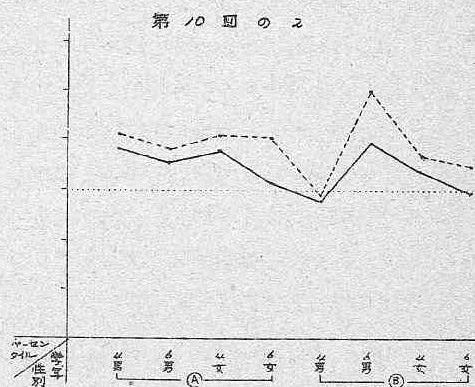
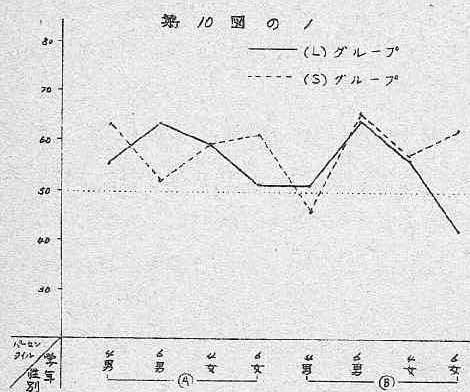
- 6年生男子③を除いては、(L)グループの母親の態度が、より矛盾している。



不一致型と道徳性のずれとの関係はどうであろうか。

第10図の1によると、6年生男子④、4年生男子③以外のすべての基礎集団においては、(S)グループのパーセンタイルが高い。すなわち、規範意識のずれの少ないグループの母親と父親は、子どもに対する態度が一致していることをあらわしている。

第10図の2においては、④・③いずれの基礎集団においても、(S)グループの両親の態度が一致していることが多いことをあらわしている。したがって、両親の子どもに対する態度が、一致しておれば、それだけ、母子間の道徳性のずれが小さくなると結論づけられる。



子どもに対するしつけの一貫性がない母親のもとにある子どもは、日常の行動のうちに少しの規則性もみだすことができず、たえず緊張をよぎなくされる。優しくされてもいつ叱られるかわからない不安があり、叱られてもその理由がつかめない状態のため情緒的不安に陥る。このように矛盾した母親からは行動の基準を学ぶとすることができず、道徳性にずれを生ずるのも当然であろう。

また、両親の態度が一致していない場合、子どもは、2つの模範、2つの命令系統の間にはさまれて不安定となり、子どもの心に迷いを与え、道徳性にずれを生じてくるのも当然であろう。なお、両親の不一致には、両親の不和によるもの、父親が拒否型母親が保護型、母親が優位的父親が従属的などいろいろあり、それぞれ、道徳性のずれに与える影響の仕方は異なるであろう。

6) まとめと考察

以上をおおまかに要約すると「母子間の道徳性のずれを大きくする母子関係の類型」としては、拒否型、服従型、矛盾・不一致型」があげられる。

拒否型は、愛情が欠けられており、いわゆる北風にもたとえられる。この北風は、学年、性別、母親の職業の有無をとわず、あらゆるグループの母子間の道徳性のずれを、より大きくしている。したがって母親の暖かい愛情につつまれて、情緒的に安定感を得ている子どもは、素直に母の考え方、価値への態度を受け入れ、また、実践に移すことが容易であり、母子間の道徳性のずれが小さくなると考える。

しかし、暖かい愛情で子どもをつつむことが、かならず母子間の道徳性のずれを小さくするものではない。拒否型が北風であるとすれば、溺愛、盲従を意味する服従型は、南風とい

えよう。このあまやかしの南風もまた、母子間の道徳性のずれを大きくする要因となっている。特にこの南風は、子どもに自己中心性・依頼心、忍耐力の欠除などの問題を形成し、実践意識のずれを大きくしている。このことは、拒否型と同様に、あらゆるグループにあてはまる。

すなわち、過度の拒否、過度の服従は、いずれにしても、子どもにとっては問題の風であり、この強い風がいつも吹いているということは、母子間の道徳性のずれを大きくする。母親は愛情と拒否とのバランスを、程よく保ち、そよ風程度の北風、南風を適当に吹かすことが、何よりも重要なことである。

しかし、母風が朝に夕に変化して、一貫性のない強い風がいつも吹いていたり、父親と母親が、反対の方向の風を吹かしている場合は、子どもの心に自信、信念、善悪の判断が養われず、道徳性のずれが大きくなっている。母親の矛盾した態度、両親の不一致の態度もまた、母子間の道徳性のずれを大きくするものとして、じゅうぶん注意を払わなければならない。

Ⅳ 規範意識のずれと母子関係

「母子関係の類型と道徳性のずれ」において、拒否型、服従型、矛盾不一致型（以下ずれの要因的類型と呼ぶ）と道徳性のずれとの間にかかなりの相関が認められたことがわかったが、ここでは、各基礎集団ごとに母子関係と規範意識のずれとの関係は、どのようなになっているかを追求し、究極的には、学年・性別、母親の職業の有無によって、ずれの要因的類型と道徳性のずれとの間にどのような相関があるかを究明する。

1) 勤めていない母親と子ども

A) 4年生男子

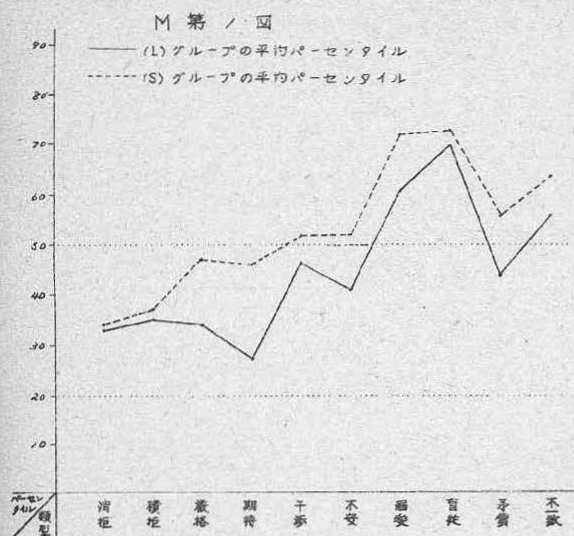
M第1図に基づいて、(S)グループと(L)グループとのパーセンタイルを比較検討する。

いずれの類型においても、(S)グループのパーセンタイルが高いが、特に、厳格・期待・不安・矛盾などの類型に顕著な差が認められる。ずれの要因的類型としての消極的拒否・積極的拒否・盲従などの類型では、(S)・(L)両グループの間の差は、どちらかといえば、小さく、4年生男子においては、これらのずれの要因的類型は、母子間の道徳性のずれを大きくする積極的要因とはいえない。

次に(S)・(L)両グループは、どのような母子関係にある事例の集りであるかを検討する。このために、手引書の判定基準に基づいて、各類型ごとに、危険な母子関係にある事例・準危険な母子関係にある事例・普通の母子関係にある事例をそれぞれ集計し、さらに、(S)・(L)各グループごとに、パーセントであらわした。

これが第1表である。（第2表から第6表は資料編に掲載する。）

この第1表の中の、普通の母子関係にある事例・危険な母子関係にある事例を比較・考察する。準危険な母子関係にある事例を考察の対象から除外する理由は、このような調査においては、被調査者の精神、身体的状況などによって調査結果が変動しがちであるが、中間グループを除外すれば一方のグループから、地方のグループに移動することは比較的少なく、より適切な資料となると考えるからである。



この考察の観点は、危険な母子関係にある事例・普通の母子関係にある事例は、それぞれ (S)・(L) いずれのグループに多いかということである。この観点に基づいて作成されたのか、N 第ノ図である。

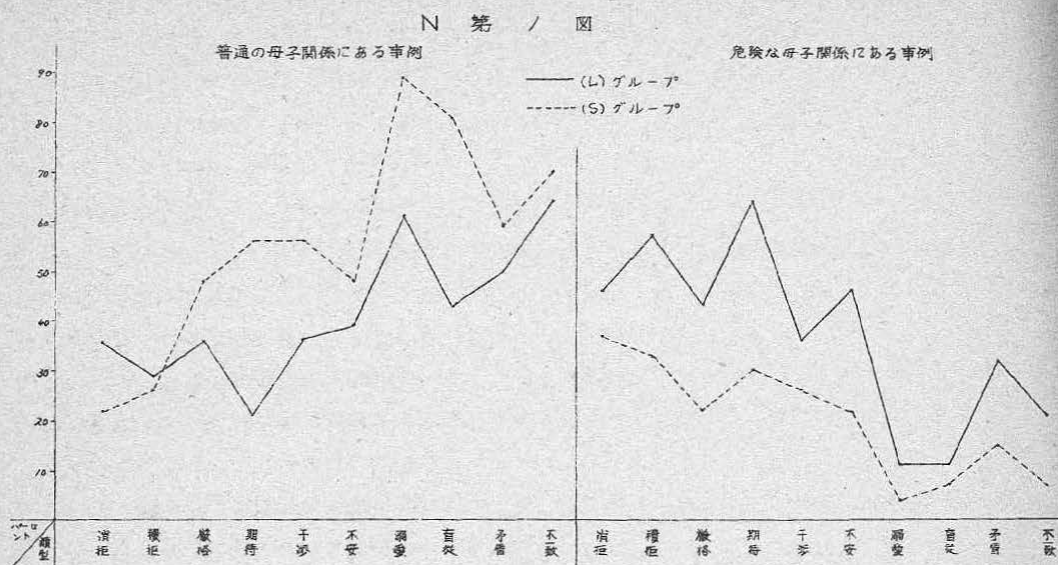
N 第ノ図によれば、どの類型においても、(S) グループには、危険な母子関係にある事例が少ない。しかし、ずれの要因的類型において、顕著な差は認められない。しかも、消極的拒否・積極的拒否の類型においては、普通の母子関係にある事例が (L) グループに多い。

したがって、4年生男子では、ずれの要因的類型（特に拒否に関する類型）は、母子間の規範意識のずれを大きくする最大の原因であるとはいえない。全体として、母子関係が良好であることが、規範意識のずれを小さくしているとみることができる。

第ノ表

グループ	類 型	消 拒	積 拒	厳 格	期 待	干 渉	不 安	溺 愛	盲 従	矛 盾	不 一 致
(L) グループ	危険な母子関係	人数	13	16	12	18	10	13	3	9	6
		%	46	57	43	64	36	46	11	32	21
	準危険な母子関係	人数	5	4	6	4	8	4	8	3	4
		%	18	14	21	14	29	14	29	11	14
	普通の母子関係	人数	10	8	10	6	10	11	17	14	18
		%	36	29	36	21	36	39	61	43	64
(S) グループ	危険な母子関係	人数	10	9	6	8	7	6	1	2	4
		%	37	33	22	30	26	22	4	7	15
	準危険な母子関係	人数	11	11	8	4	5	8	2	3	7
		%	41	41	30	15	19	30	7	11	26
	普通の母子関係	人数	6	7	13	15	15	13	24	16	19
		%	22	26	48	56	56	48	89	59	70

注・標本数…… (L) グループ 28事例, (S) グループ 27事例
 ・パーセントは小数第一位で四捨五入

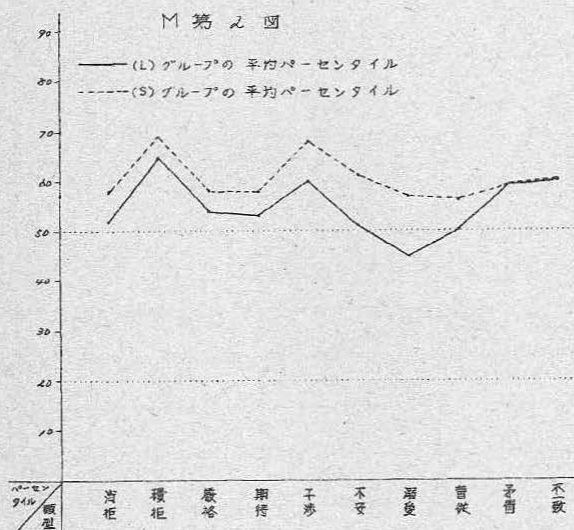


B) 4年生女子

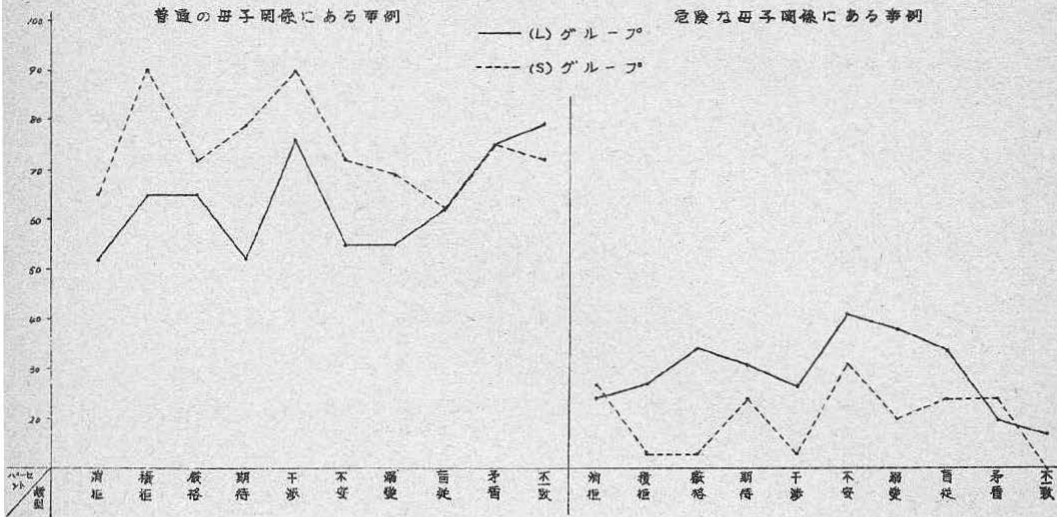
M第2図によれば、矛盾、不一致の類型では、(S)・(L)両グループのパーセンタイルが相等しいが、その他の類型では、(S)グループのパーセンタイルが高い。しかし、4年生女子においても、ずれの要因の類型では(S)・(L)両グループ間に、特に著しい差は認められない。また、N第2図によれば、消極的拒否・矛盾の各類型では、(S)グループに危険な母子

関係にある事例が多く、不一致の類型では、(L)グループに普通の母子関係にある事例が多い。したがって、4年生女子においても、ずれの要因の類型は、母子間の規範意識のずれを大きくする最大の原因であるとはいえない。4年生男子と同様に、母子間の規範意識のずれを小さくするには、母親が、どの類型においても、望ましい態度で子どもに接することが必要である。

なお、4年生男子と4年生女子とのパーセンタイルを比較するとほぼ全類型において、女子が著しく高い。普通の母子関係にある事例・危険な母子関係にある事例を比較しても、女子と母親との関係



N 第 2 図

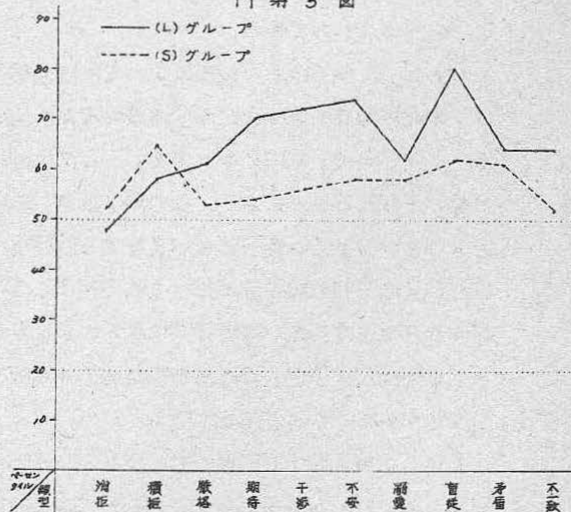


が男子と母親との関係より良好であることがわかる。しかし、このことから、女子に接する母親の態度に、矛盾・拒否・過保護の傾向は少ないと断定することはできない。母子関係の評価は主観的のものであり、どこでも、誰にも共通な絶対的な尺度は作成されていないからである。この男女間の差は、それぞれの精神的・身体的発達の違い、家庭内の役割の違いに起因するものであろう。

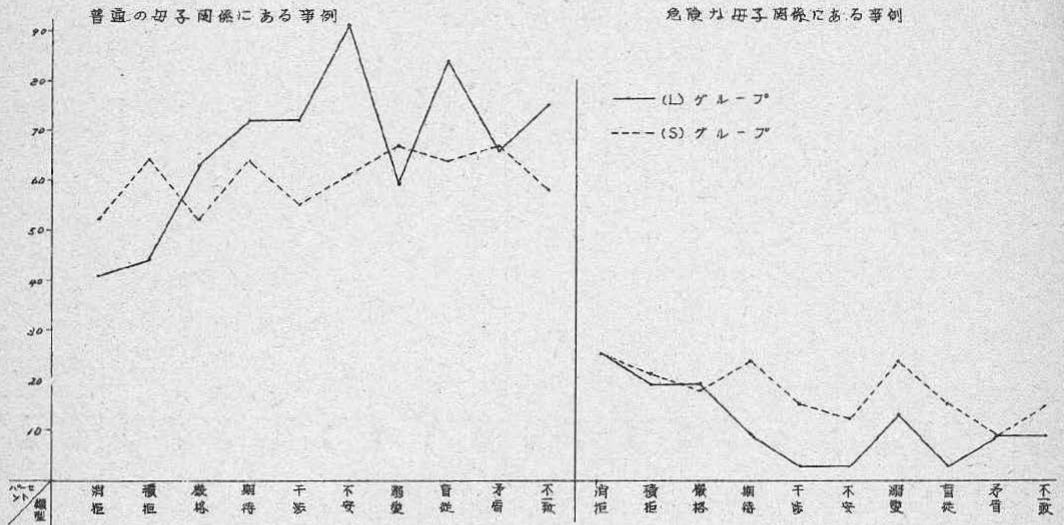
なお、母親が勤めている家庭の母子関係は、母親が勤めていない家庭の母子関係よりも悪いと考えられがちであるが、以下に示す調査結果では母親の職業の有無によって、母子関係にはほとんど差がないということがいえる。このことは4年生男子女子に共通にみられる。

C) 6年生男子

M 第 3 図



N 第 3 図

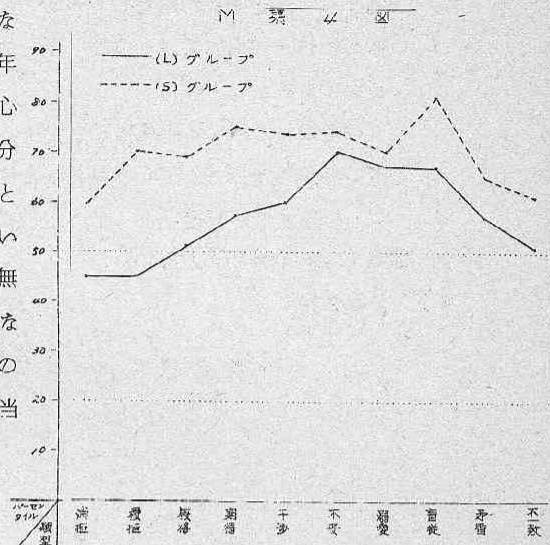


6年生男子は、4年生男女と異なり、(S)グループの母子関係が、より良好な類型は、積極的拒否・消極的拒否の2類型だけである。この傾向は、N第3図にもみられる。したがって、6年生男子では、母親が子どもに接する態度が拒否の傾向が強いかどうか、母子間のずれを大きくする最も重要な条件であるとみることができる。すなわち、子どもに最も大切である安定感、母親の無視・放任・偏愛・屈辱・虐待などの愛情の欠除した行為によって、そこなわれ、子どもは母親に反感を抱き、規範意識にずれを生ずるようになると考えられるからである。

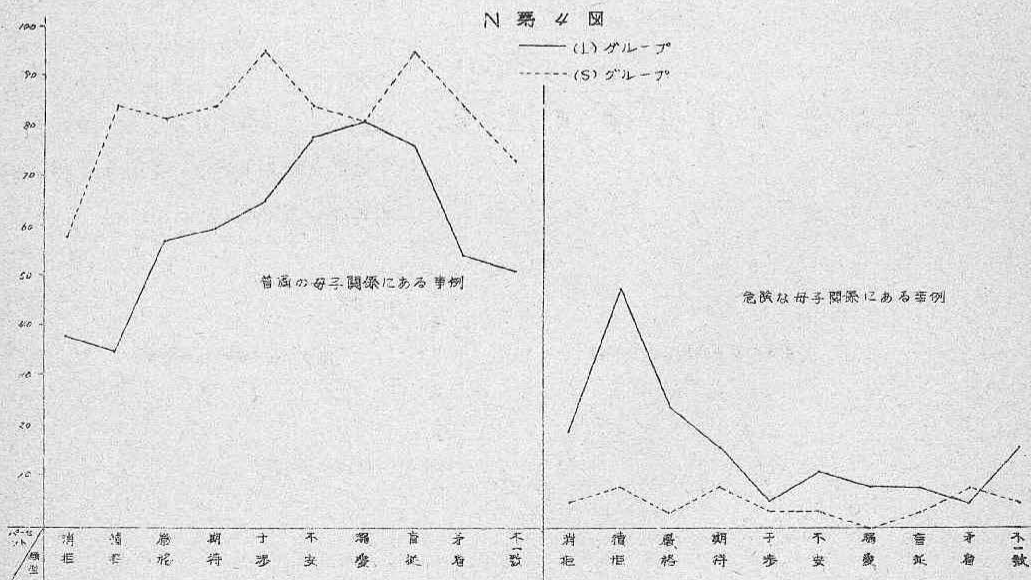
しかし、この6年生の傾向については別の解釈もできる。すなわち、この年頃の子どもは、権威道徳より自律道徳への過渡期にあり、道徳的判断がかなりでき、多少批判的になる。したがって、家庭においても、子どもは母親の権威から独立し、自らの判断に基づく行動がとられるようになる。この時、母親が過度の厳格・干渉・不安・溺愛などの態度をとることが少なく、母子関係が良好であれば、母親と何事も語りあえる自由な雰囲気は醸成され、母子間の規範意識に、ずれが生ずるようになる。しかし、以上の類型で、母子関係が良好でなければ、両者の間に感情のしこりが生じ、さらに、これが一つのコンプレックスを形成し、子どもが母親の価値基準から独立することを困難にし、母子間の規範意識のずれが少なくすると推定できる。

しかし、第Ⅱ部・Ⅱにおいて、ずれの小さいグループは、母子ともに道徳性が高いことを明らかにした。しかも、(S)グループの母親は、社会成員としての道徳性が高く、したがって、(S)グループの家庭には民主的雰囲気、より満ちており、この意味において良好な母子関係が形成されていると考えた。しかるに、規範意識のずれが大きい場合、母子関係は、より良好であり、ずれが小さい場合母子関係は好ましい状態にないという考えは、これと矛盾するものである。

したがって、6年生男子においては、母子間のずれを小さくするには、特に拒否的態度に留意することが重要であると考え。すなわち、さきに述べたように、5・6年生になると父母に対しても批判的・反抗的になるという傾向がでてくるが、これは青年期におこる父母から離反しようとする心理のきざしである。この時、母親が自分に対して愛情をもっていないと感じると子どもの心はさびしく、すさんでしまい母親が言うこと、することは、自分を無視し、圧迫するものとうけとりがちになり、したがって、反抗心を強め母子間のずれを大きくすると推定したほうが妥当であろう。



D) 6年生女子



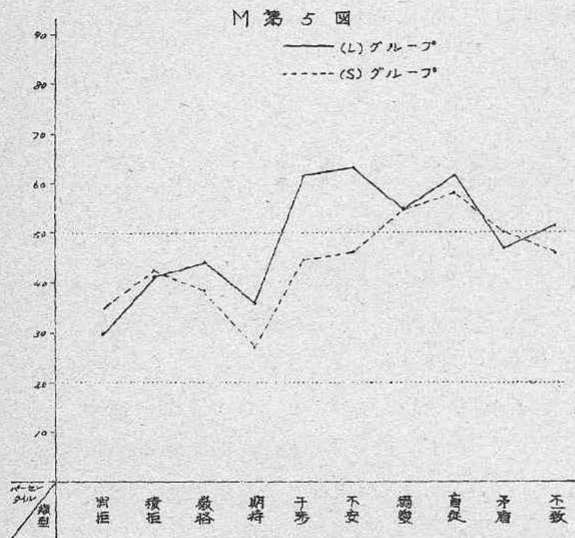
6年生女子は、4年生男女と同様に、全類型において、(S)グループの母子関係は(L)グループの母子関係より、より良好である。しかも、ずれの要因的類型である消極的巨否・積極的拒否・不一致・嚴格に著しい差がみとめられる。この傾向は、M・N第4図にあらわれている。

したがって、6年生女子では規範意識のずれを小さくするには、①全類型において、望ましい母子関係が成立していることが必要であるとともに、②ずれの要因的類型（積極的拒否・消極的拒否・溺愛・不一致）にとくに注意を払わなければならないとみることができる。

以上のように、6年生男子と女子とが相反する傾向があらわれているが、これは、日本の封建的な因習、男女の精神・身体的発達の違い、家庭における男女による地位・役割の相違などが原因となっているのであろう。

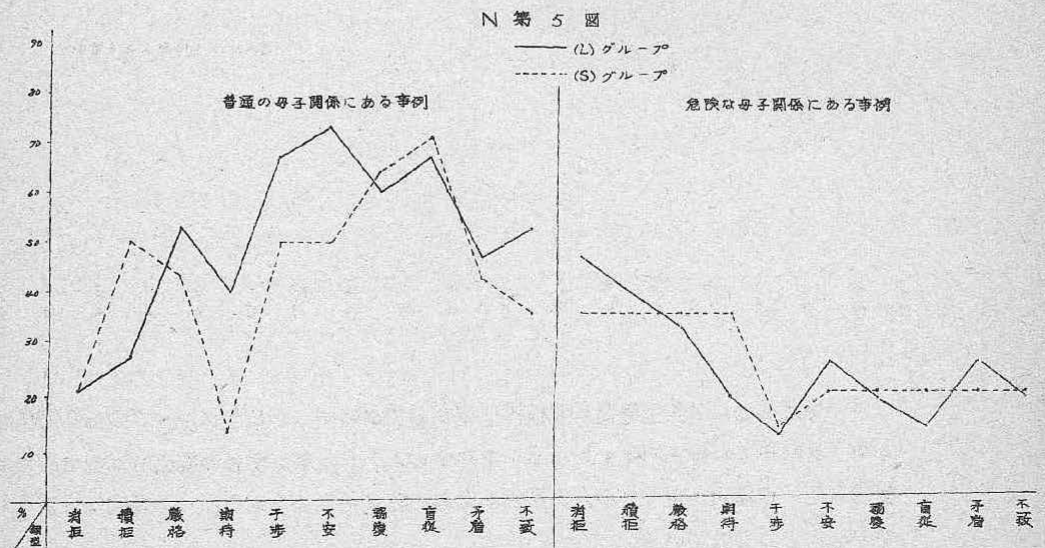
2) 勤めている母親と子ども

A) 6年生男子



M・N第5図を概観すると、(S)グループの母子関係が、より良好な類型は、消極的拒否・積極的拒否の2類型である。また、M・N第5図に共通してみられる傾向ではないが、盲従・溺愛・矛盾の類型においても、(S)グループの母子関係が、より良好とみることができる。

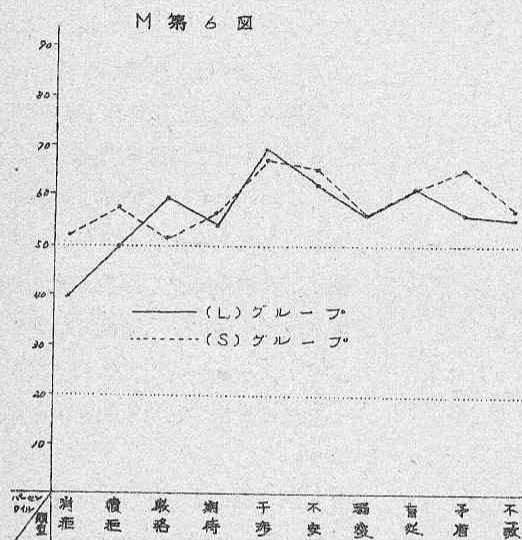
このように、(S)グループの母子関係は、ずれの要因的類型において、やや良好とみることができるがその他の類型では、(L)グループの母子関係は、より良好であり、6年生男子（母親が勤めていない家庭）と同じ傾向を示している。



したがって、4年生男子（母親が勤めている家庭）については、6年生男子（母親が勤めていない家庭）と同様な結論がいえる。

しかし、手引書の判定基準に従えば、4年生男子の母子関係は、6年生男子の母子関係ほど、良好とはいえない。これは、ギヤング時代といわれる集団集合期に達し、しかも、反抗期という4年生の発達段階的特性によるものであろう。

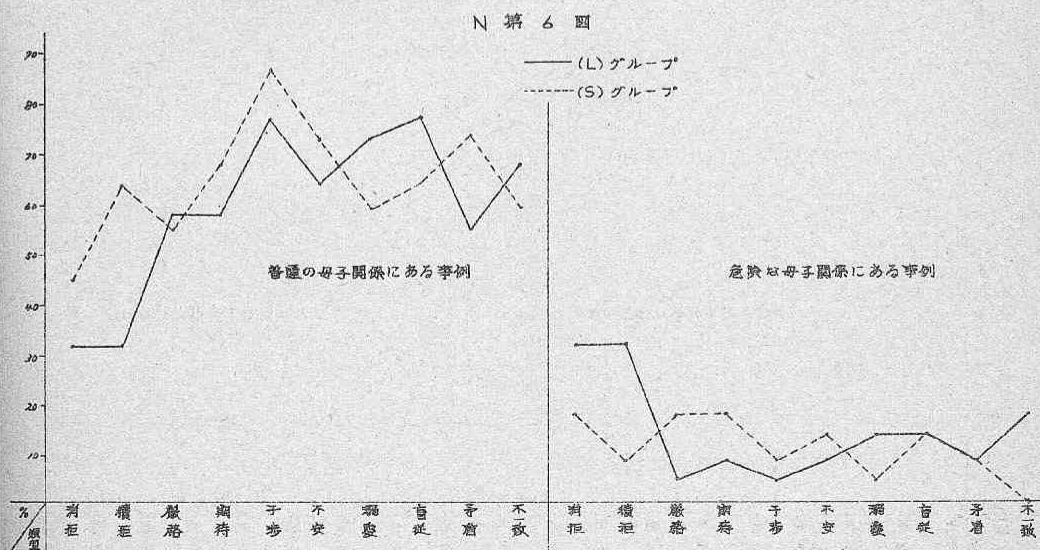
B) 4年生女子



M第6図によれば、(S)グループのパーセントが高い類型は、積極的拒否、消極的拒否・期待・不安・矛盾、不一致の6類型であり、類型の数の上で、(S)グループの母子関係は、より良好であるばかりでなく、ずれの要因的類型（拒否・矛盾・不一致）においても、(S)グループの母子関係が、より良好である。

以上のように、4年生女子では、母親の職業の有無にかかわらず、(S)グループの母子関係は、より良好であるが、母親が勤めている場合、(S)・(L)両グループ間のパーセンタイルの差は小さい。母親が勤めていない家庭では、子

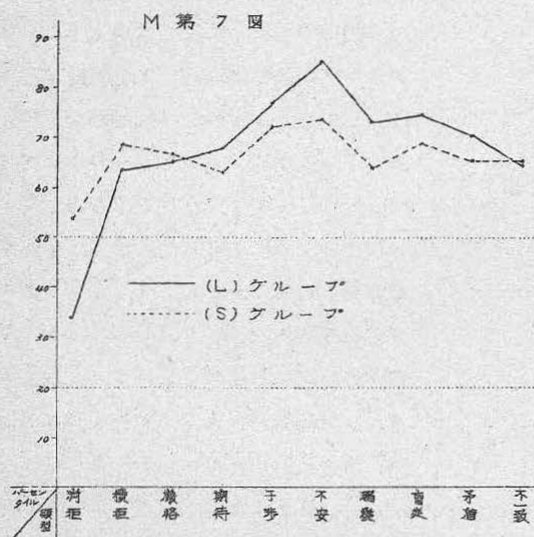
どもは母親と一緒に過ごす時間が少ないわけであるが、このような場合わずかの母子関係（とくに、ずれの要因的類型における）のよしあしが、母子間の道德性のずれを作る原因となるとみることもできる。



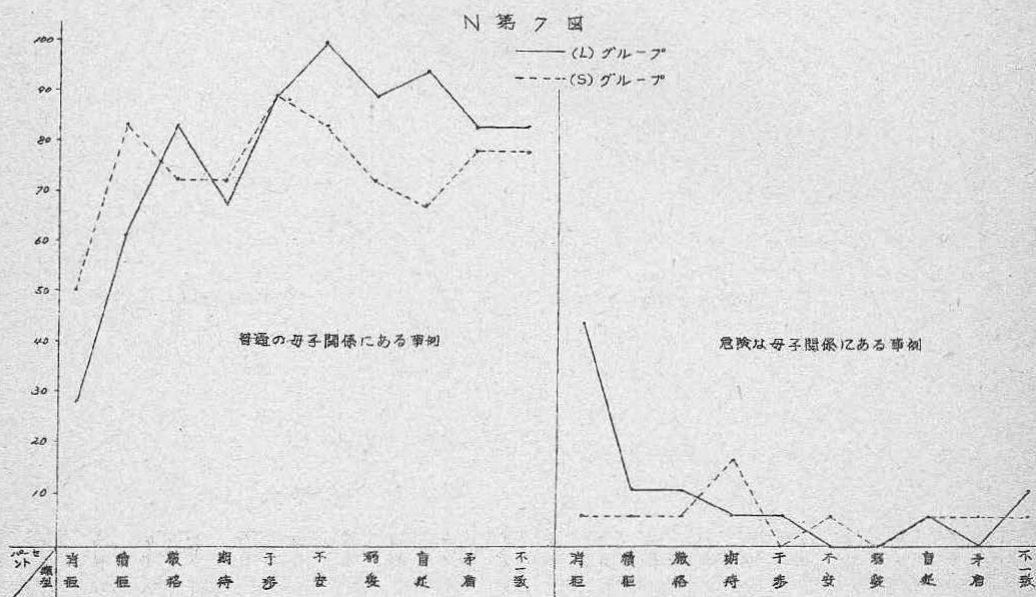
共稼ぎの家庭の子どもは、母親と一緒に生活する時間が短かく、したがって、母親の行動の型を経験的学習過程をとおして、学ぶ機会が少なくなる。この場合、母子関係のあり方がわずかでも良好であれば、子どもの学習速度は著しく促進され、非常に効果があるとみることができる。

したがって、母親が勤めている家庭では、母子間の規範意識のずれを小さくするためには、よりよい母子関係（特にずれの要因的類型について）を形成するように細心の注意をはらわなければならないと考える。

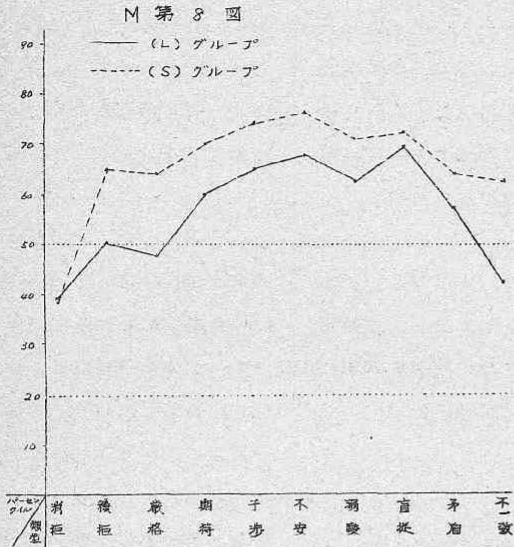
0) 6年生男子



6年生男子は、母親が家庭にいる場合と同様に、拒否、厳格などの類型では、(S)グループの母子関係が、より良好である。しかも、この類型における(S)・(L)両グループのパーセンタイルの差は、6年生男子（母親が勤めていない家庭）4年生男子（母親が勤めている家庭）にみられる差よりも、大きい。この傾向はN第7図にも明瞭にあらわれている。したがって母親が勤めていない家庭の6年生男子と同様な結論がいえる。

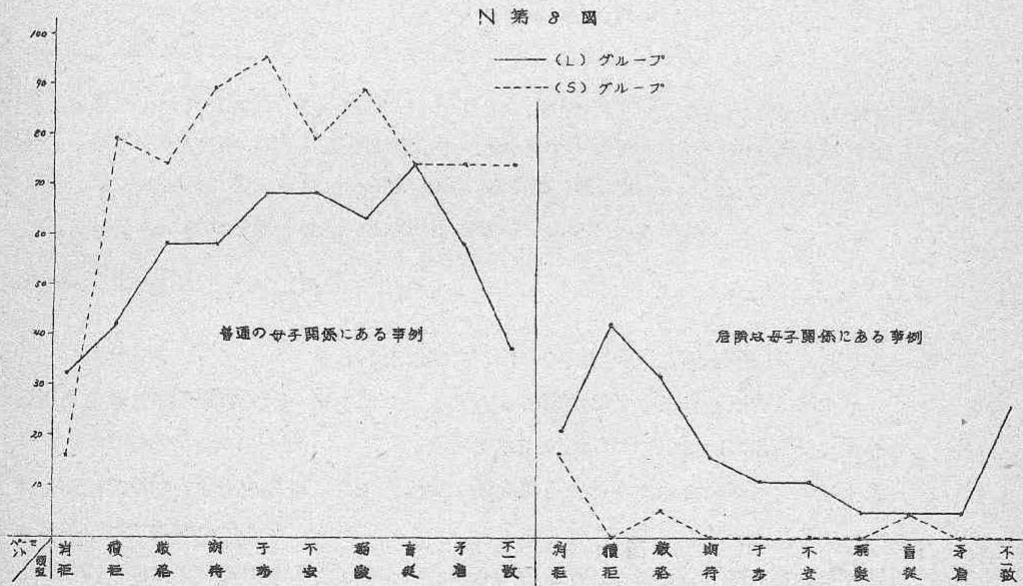


D) 6年生女子



6年生女子は、母親が勤めていない場合と同様に、(S)グループの母子関係は(L)グループの母子関係より良好である。しかし、消極的拒否の類型では、わずかの差であるが、(L)グループのパーセンタイルが高い。この傾向はM図においては、最初のものである。しかし、N第8図によれば、(S)グループに危険な母子関係にある事例が少なく、どちらかといえば、(S)グループの母親の態度が、より良好とみることができる。

したがって6年生女子では、母子間の規範意識のずれが小さいグループは、いずれの類型においても、母子関



係は良好であり、それゆえ母子間の規範意識のずれを少なくするにはずれの要因的類型のみならず、全類型において、より良好な母子関係を形成する必要があるといえよう。

さきに母親の職業の有無により母子関係にほとんど差は認められないと述べたが、4・6年生男女共通にみられる傾向として、母親が勤めている家庭の子どもは、母親に拒否されていると感ずるものが、比較的多いということが認められる。最近、共稼ぎが問題にされているが、この事実は、この問題に何か示唆を与えるものがある。

3) まとめと考察

以上の調査結果をごくおおまかに、基礎集団ごとに要約してみる。

	母親が勤めていない家庭	母親が勤めている家庭
4 年 生 男 子	全類型において、(S) グループの母子関係が、より良好しかしずれの要因的類型に顕著な差は認められない。	拒否・矛盾の2類型では(S) グループの母子関係が、より良好である。
4 年 生 女 子	全類型において、(S) グループの母子関係が、より良好。しかし、ずれの要因的類型に顕著な差は認められない。	拒否・期待・不安・矛盾不一致の各類型において、(S) グループの母子関係が、より良好。特に、拒否型、矛盾不一致型に差が著しい。
6 年 生 男 子	拒否の類型においてのみ、(S) グループの母子関係がより良好である。	拒否・不一致の2類型では、(S) グループの母子関係がより良好である。
6 年 生 女 子	全類型において、(S) グループの母子関係が、より良好 特に消極的拒否・積極的拒否の2類型に顕著な差が認められる。	ほぼ、全類型において、(S) グループの母子関係が、より良好。特に積極的拒否、矛盾不一致に顕著な差がある。

◎ 男女別に、母子関係と規範意識のずれとの関係をみると

- ・ 4・6年生女子ともに、どの類型においても、(S) グループの母子関係はより良好であり、この傾向は、拒否の類型に顕著である。
- ・ 4・6年生男子に共通にみられる傾向は、消極的拒否・積極的拒否の類型では、(S) グループの母子関係が、より良好であるということである。その他の類型では、学年、母親の職業の有無により異なるが、どちらかといえば、(I₁) グループの母子関係が、より良好とみることができる。

◎ 母親の職業の有無によって、母子関係と規範意識のずれとの関係をみると、

- ・ 母親が勤めていない家庭に共通にみられる傾向は、消極拒否、積極拒否の類型では、(S) グループの母子関係が、より良好であり、その他の類型では、6年生男子を除くと(S) グループの母子関係が、より良好であるということである。
- ・ 母親が勤めている家庭では、男子は拒否・矛盾不一致の2類型で(S) グループの母子関係が、より良好であり、女子はほぼ全類型で(S) グループの母子関係は、より良好である。

以上のように、母子関係と規範意識のずれとの関係は、学年・性別・母親の職業の有無により、かならずしも一致しないが、どの基礎集団にも共通していることは、拒否の類型では、(S)グループの母子関係がより良好だということである。すなわち、(S)グループの子どもは、母親に愛情の拒否をうけることが少ないということである。

今日の家庭は、かつての家庭が有していた多くの機能をだんだん失い、その機能は非常に少なくなってきた。しかし、今日の家庭に残された重要な機能、すなわち、外部社会ではとって代わり得ない独特の機能は、家庭が解放された相互の暖かい愛情によって、心のやすらぎを与える機能であろう。人間が接触する外部社会が広がり、その構造が複雑になるにつれて、人間関係も複雑になり、緊張した生活を続けることが多くなる。このことは子どもにそのままあてはまることである。ここで子どもが暖かい愛情につつまれて、自由な自己表現をなし得ることによって、緊張から解放され、とかく、不均衡になりがちな心の在り方を安定することができる。これは家庭の治療的機能ともいうべきものであり、この機能は、主として、母親によって果たされているといえよう。

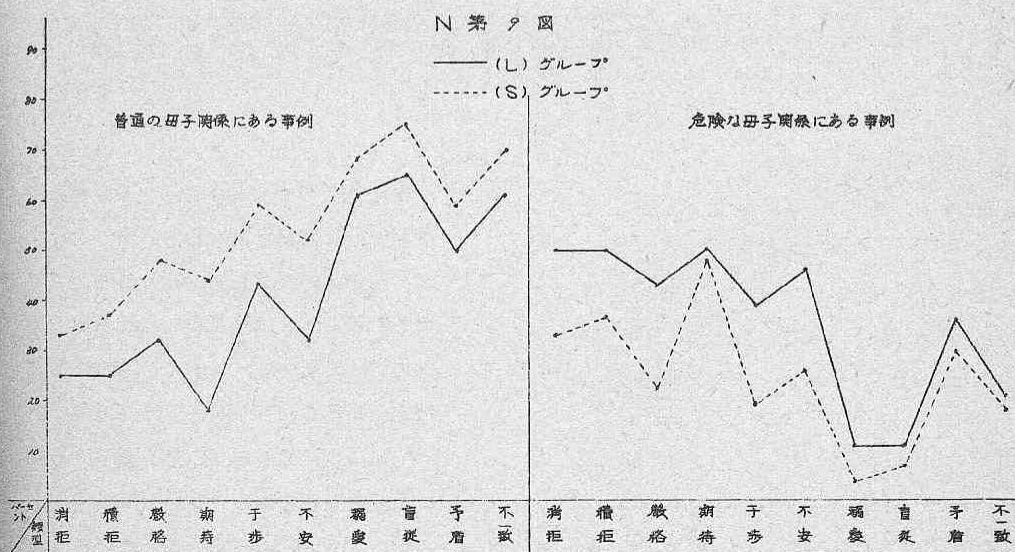
母子親の暖かい愛情は治療の意味においても、また、子どもの正しい道德観・道德的心情を高め母親とのずれを小さくする意味においても、欠くことのできないものであることが、この調査結果から認めることができる。

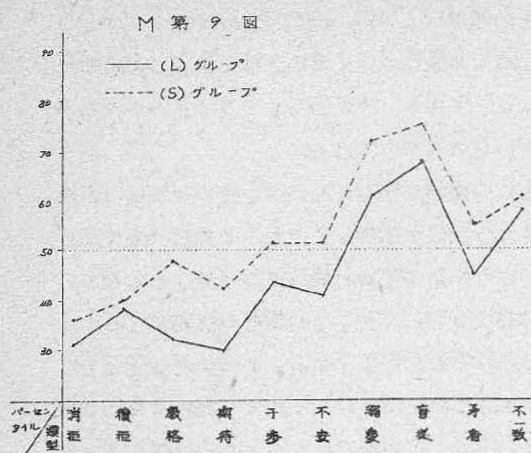
V 実践意識のずれと母子関係

各基礎集団ごとに母子関係と実践意識とのずれとの関係はどのようなになっているかを追求し、究極的には、学年、性別、母親の職業の有無によって、ずれの要因的類型と実践意識のずれとの相関はどのようであるかを究明する。

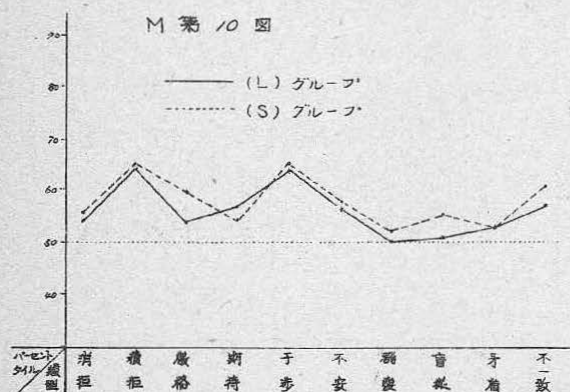
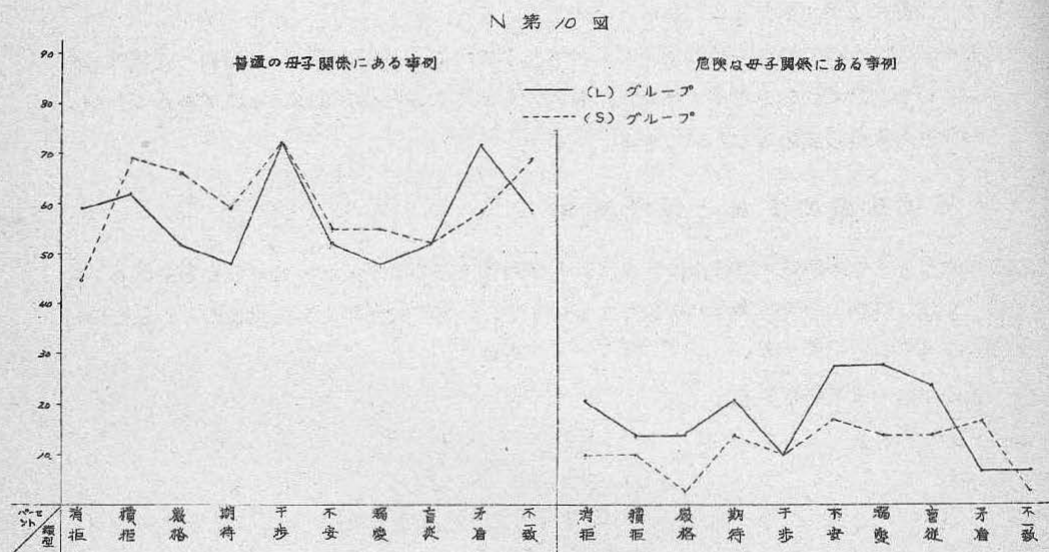
1) 動めていない母親と子ども

A) 4年生男子





B) 4年生女子

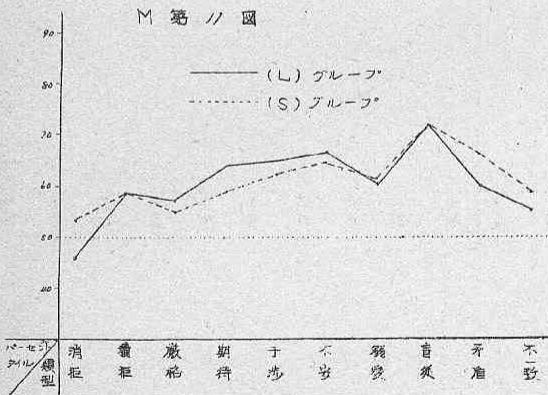
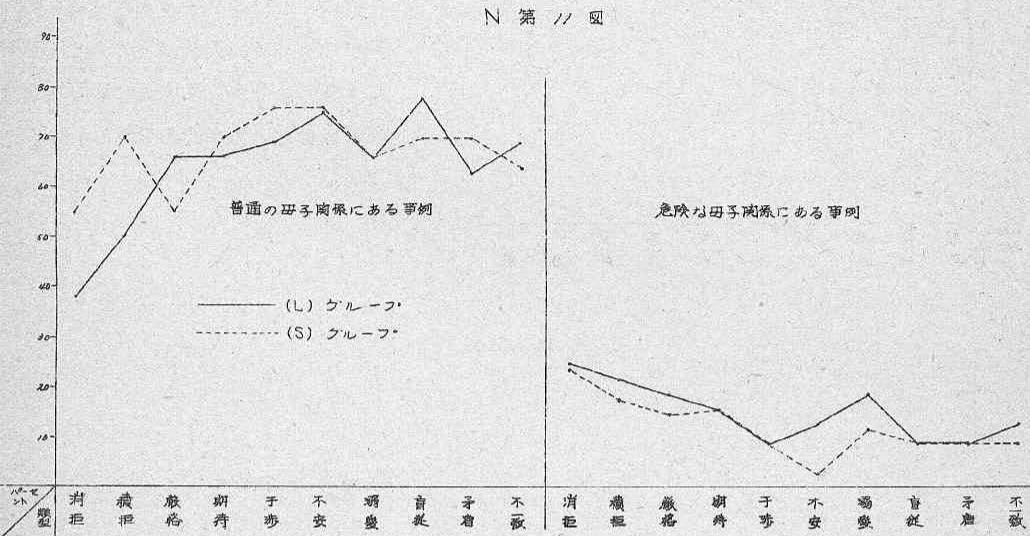


M・N 第 9 図について詳細に説明するまでもなく、全類型において (S) グループの母子関係は、より良好であるとみることができる。したがって、母子間の道徳性のずれが小さくするには、拒否・服従・矛盾・不一致の類型のみならず、全類型において母子関係は、より良好であることが一つの条件であるといえることができる。

規範意識のずれが小さいグループの母子関係はより良好であるということは、M・N 第 2 図に示したとおりかなり明瞭にあらわれた。実践意識のずれと母子関係については、M・N 第 10 図のグラフに描かれたとおり、期待以外の類型においては (S) グループの母子関係がより良好である。しかし (S) グループと、(L) グループとの間のパーセンタイルの差は、僅少であり、判断に苦しむとこ

ろであるが、どちらかといえば、良好な母子関係は、母子間の実践意識のずれを小さくするとみることができる。しかし、ずれの要因の種類は、ずれを小さくする積極的要因とはいえない。

C) 6年生男子

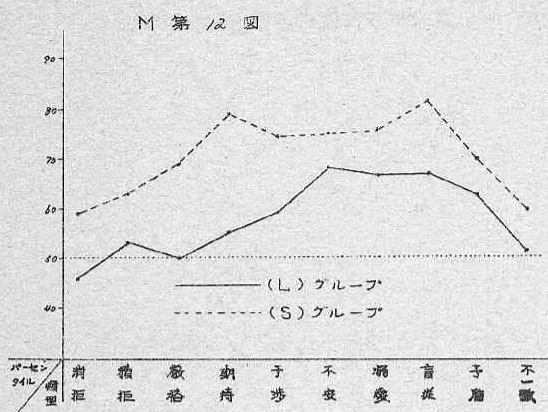


M 第 // 図によれば、さきに、ずれを大きくする要因として述べた消極的拒否、溺愛・矛盾・不一致などの類型では、(S) グループの母子関係は、より良好であるが、その他の類型では (L) グループの母子関係が良好である。

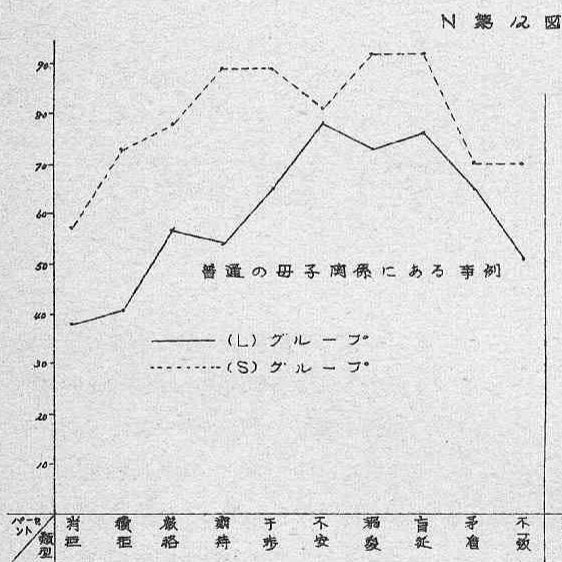
しかし、N 第 // 図に基づいて、普通の母子関係にある事例・危険な母子関係にある事例に関するパーセントを

調べると、2・3の例外はあるにしても、全体としては、(S) グループの母子関係はより良好であるとみることができる。したがって、実践意識のずれを少なくするには、単に、拒否・服従・矛盾・不一致の類型のみならず、全般的に母子関係がより良好な状態にあることが望ましいわけである。

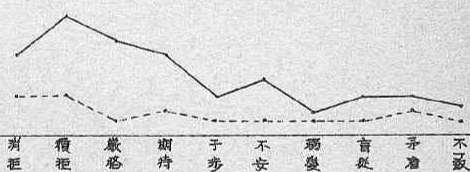
D) 6年生女子



M・N第12図によれば、ずれの要因的類型のみならず、すべての類型において、(S)グループの母子関係はより良好である。しかも、(S)グループのパーセンタイルと、(L)グループのパーセンタイルとの差は、非常に大きい。しかし、ずれの要因的類型に特に著しい差が認められるわけではない。



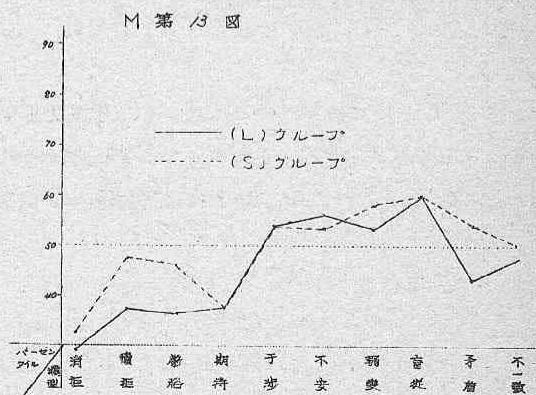
危険な母子関係にある事例



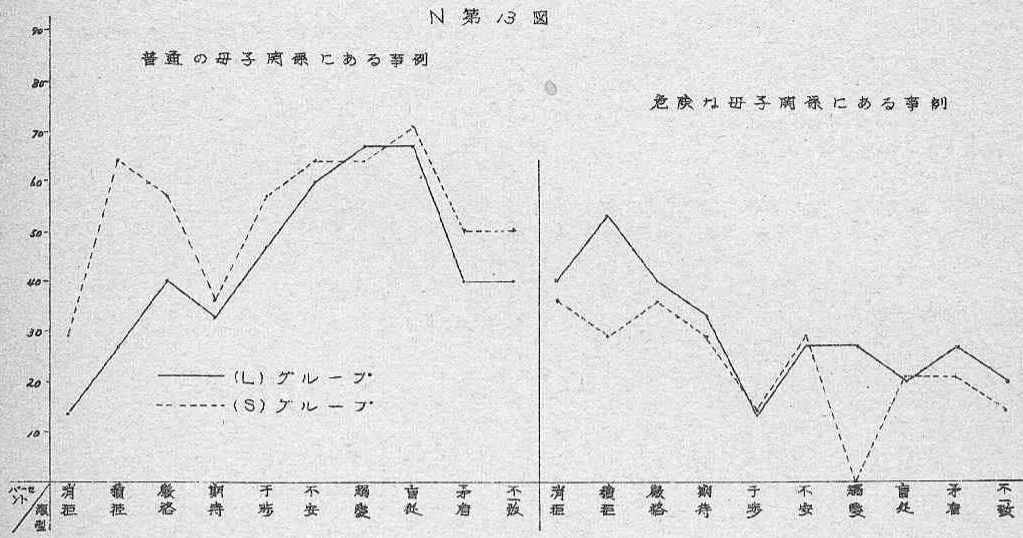
2) 勤めている母親と子ども

A) 4年生男子

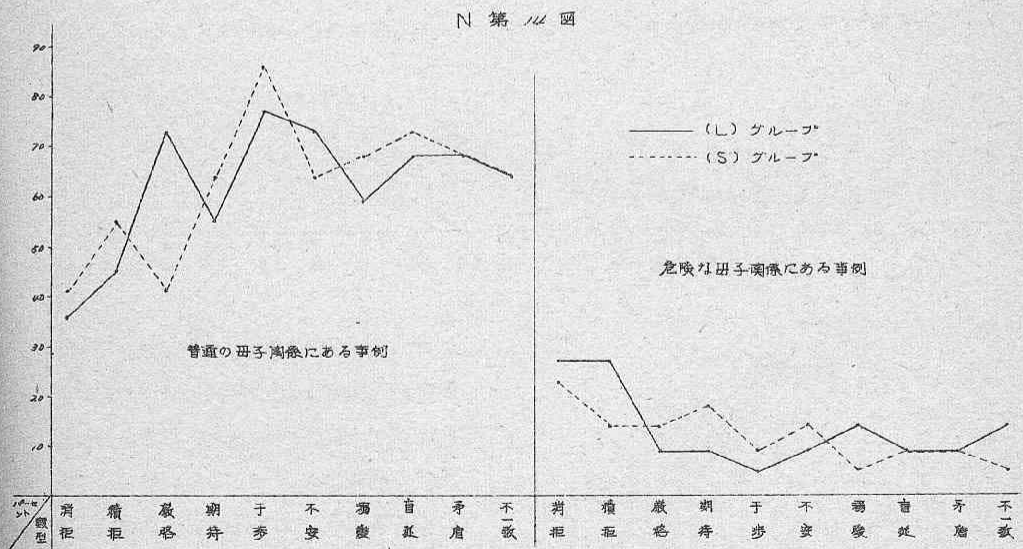
母親が勤めていない場合と同様に、(S)グループの母子関係は、(L)グループの母子関係より良好であり、この傾向は、積極的拒否・消極的拒否・厳格・矛盾・不一致の類型に顕著にみられる。しかし、(S)グループと(L)グループとのパーセンタイルの差は、M第9



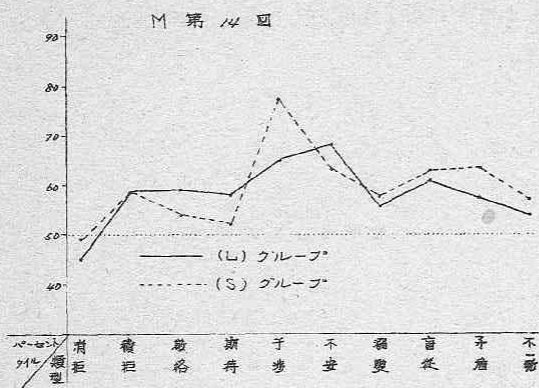
図（母親が勤めていない家庭）にみられるほど大きくない。これは、子どもの母親と一緒に過ごす時間の少ない共稼ぎの家庭にあっては、わずかの母子関係のよしあしが、母子間の道徳性のずれに大きく影響するとみることができる。



B) 4年生女子

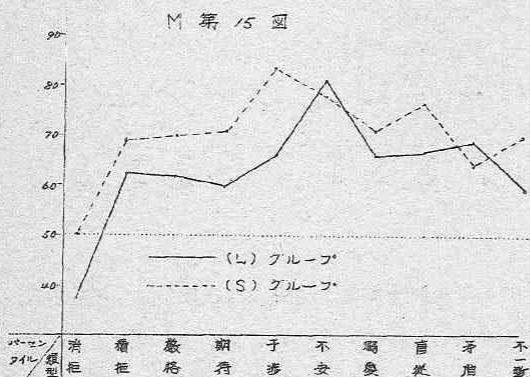
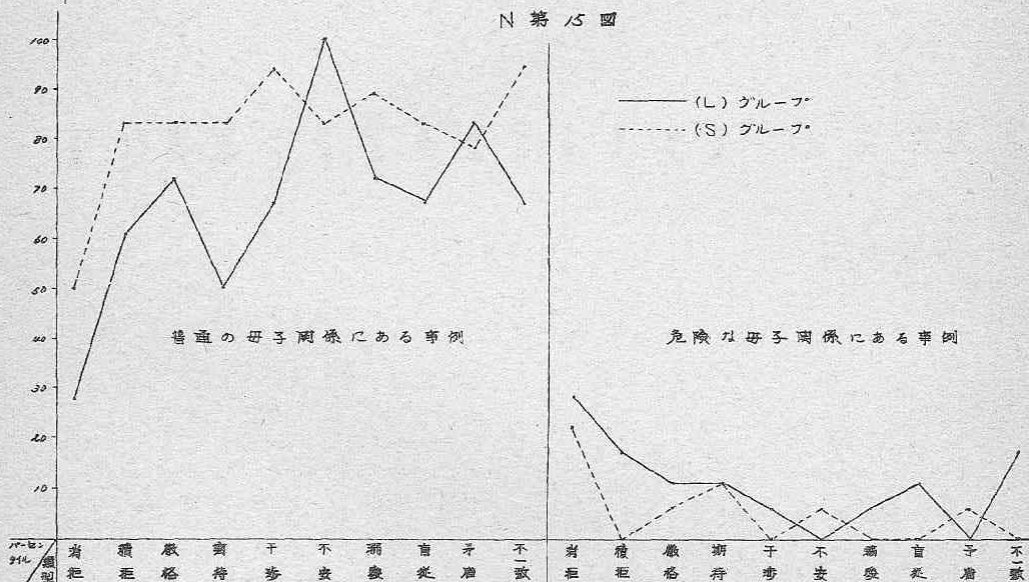


M・N 第 14 図をみると、(S) グループが、より良好な母子関係にある類型は、消極的拒否・積極的拒否・溺愛・盲従・矛盾・不一致であり、これは、ずれを大きくする要因としてあげた類型である。しかし、その他の類型においては、どちらかといえば、(L) グループの母



子関係がやや良好とみることができるが、4年生女子においては、さきに述べた要因としての類型において、母子関係がより良好であれば、母子間のずれは少なくなると推定することができる。

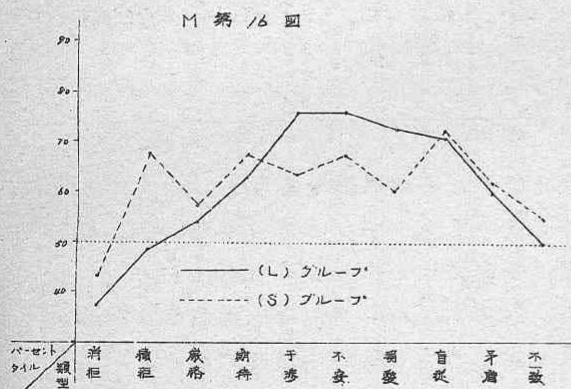
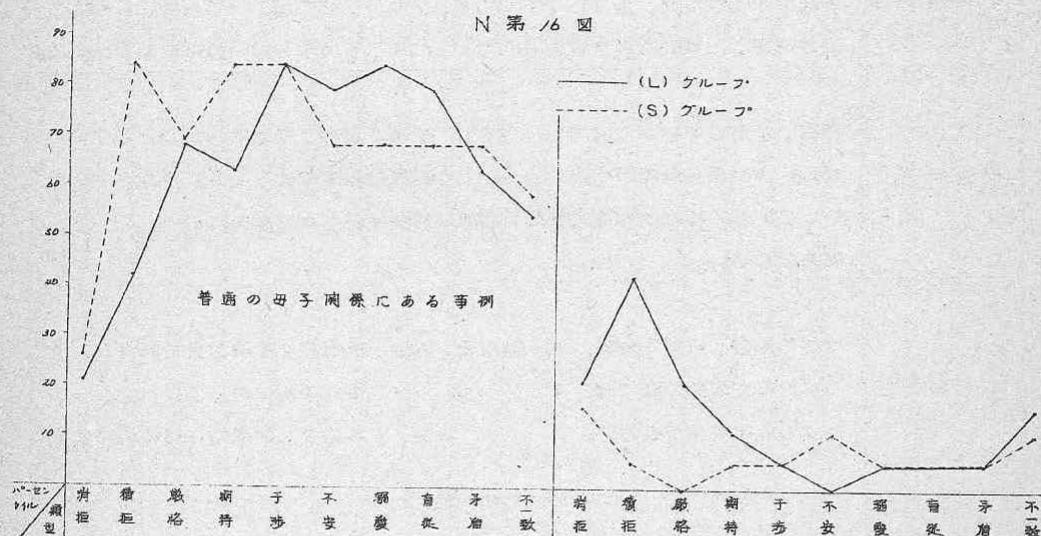
0) 6年生男子



M・N第15図によれば、不安・矛盾の類型では、(L)グループの母子関係がより良好であるといえる。特に、矛盾の類型において、(L)グループの母子関係が、より良好であるということは、多少問題になるが、全体としては、(S)グループの母子関係は、より良好とみることができる。したがって、母親が勤めていない場合と、だいたい同様な結論がいえるが、しかし、

母親が働いていない家庭では、(L)・(T)両グループ間のパセリスタイルの差がより明瞭であり、共稼ぎの家庭にあっては、母親の子どもに対する態度のよしあしは、母子間の道徳性のずれにかなり大きく作用するといえよう。

D) 6年生女子



M・N第12図によれば、母親が勤めていない家庭では、(S)グループは(L)グループより全類型において母子関係は良好であった。しかし、母親が勤めている家庭では、M・N第16図に示したとおり、干渉・不安・溺愛などの類型では、(L)グループの母子関係が、より良好である。母親が勤めている家庭では、子どもと母親が接触する機会が少ないため過保護の傾向

がつよいほうが、母子間の実践意識のずれを小さくするということができる。すなわち、母子間の実践意識のずれを防ぐには、母親の拒否・支配・矛盾不一致の類型における態度がより良好であることが大切であるが、不安・干渉の類型においては、どちらかといえば保護的傾向があるほうがよいとみることができる。4・6年生男女をとおしてみると規範意識のずれと母子関係において認められたと同様のことがいえる。すなわち、母親の職業の有無によって母子関係にはほとんど差は認められないが、消極的拒否の類型においては、母親が勤めている家庭の子どもは母親に拒否されていると感じることが多いという傾向がみられるからである。

3 まとめと考察

以上の調査結果をごくおおまかに、基礎集団ごとに要約する。

	母親が勤めていない家庭	母親が勤めている家庭
4年生男子	全類型において、(S)グループの母子関係がより良好。しかし、ずれの要因的類型に、顕著な差は認められない	ほぼ、全類型において、(S)グループの母子関係が、より良好。しかも、拒否、矛盾不一致の類型に著しい差がある
4年生女子	期待、矛盾の2類型以外では、(S)グループの母子関係が、より良好。しかし、ずれの要因的類型に著しい差は認められない。	拒否、服従、矛盾不一致などのずれの要因的類型では、(S)グループの母子関係が、より良好。
6年生男子	消極的拒否、溺愛、矛盾、不一致などのずれの要因的類型では、(S)グループの母子関係が良好。	不安、矛盾の2類型以外では(S)グループの母子関係が、より良好。しかし、ずれの要因的類型に特に顕著な差はない。
6年生女子	全類型において、(S)グループの母子関係がより良好。しかし、ずれの要因的類型では、特に著しい差はない。	拒否、矛盾不一致、盲従などのずれの要因的類型や支配型など、ほぼ全類型において、(S)グループの母子関係がより良好。

◎ 男女別に母子関係と実践意識のずれとの関係をみると

- ・ 4・6年生男子に共通して、(S)グループの母子関係がよい類型は、消極的拒否・積極的拒否・盲従・不一致の4類型であり
- ・ 4・6年生女子に共通して、(S)グループの母子関係がよい類型も消極的拒否・積極的拒否・盲従・不一致の4類型である。

◎ 母親の職業の有無によって、母子関係と実践意識のずれとの関係をみると

- ・ 母親が勤めていない家庭では、4・6年生に共通していえることは、消極的拒否・積極的拒否・溺愛・盲従・不一致の5類型では、(S)グループの母子関係が良好であるということである。
- ・ 母親が勤めている家庭では、4・6年生ともに、消極的拒否・積極的拒否・盲従・不一致の類型では、(S)グループの母子関係が良好である。

以上のように、母子関係と実践意識のずれとの関係は、学年・性別・母親の職業の有無によ

り、多少異なるが、どの基礎集団にも共通していえることは、消極的拒否・積極的拒否・盲従・不一致などのずれの要因的類型では、(S)グループの母子関係が良好だということである。規範意識のずれを大きくする母の態度として拒否的態度一つだけをあげたが、実践意識のずれを大きくする母親の態度には、さらに服従的態度・矛盾不一致の態度もあげられる。

子どもの実践意識を啓培するために、大切なものは、母親の規範意識よりも母親の実践意識、すなわち、母親によって示される行動の型であろう。子どもは経験的学習過程、行動的学習過程をとおり、母親の行動の型を学んでいく。この学習過程において働く重要な因子は、母子間の感情の交流関係である。この学習を効果的に促進するためには、母親の愛情は、いかに大切であるか、愛情の過多と欠乏がいかに子どもの道徳性の啓培を妨げるかなどが、この結果によくあらわれている。

Ⅶ 道徳性のずれと出生順位

子どもが、兄弟の中で第何番目に生まれただりであるかということが、その子どもの家庭における地位・役割・人間関係を規定し、ひいてはまた、その子どもの心理的行動的特性の形成に影響をもつらしいことは、総領の甚六・次男坊、末っ子などの言葉が、ひろく用いられている事実からも、容易に推察される。しかし、これらの言葉が、それぞれ何かしら、ある特徴を漠然と予想していることは間違いのないにしても、その内容は必ずしも明確ではない。したがって、ここでは、子どもの出生順位と母子間の道徳性のずれ(母子関係も含めて)との間にどのような相関があるかを追求し出生順位により特定の傾向が認められるかどうかを解明する。

ノ) 規範意識のずれと出生順位

長男・中間子・末子・一人子は、それぞれ、どのような割合で、(S)グループと(L)グループにわかれていたかを調査し、出生順位と母子間の規範意識のずれとの間にどのような相関があるかを追求する。

の部分は、(S)グループに属す人数をパーセントであらわしたものである。

の部分は、(L)グループに属す人数をパーセントであらわしたものである。

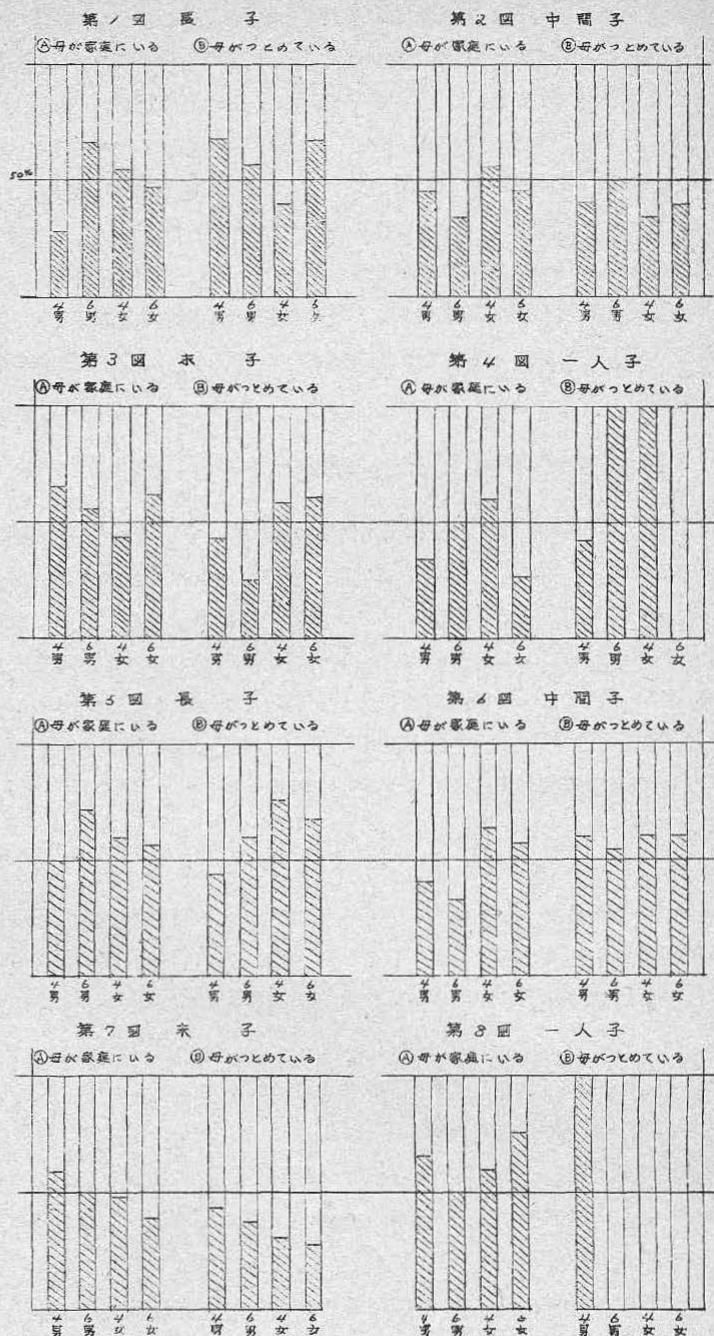
第ノ図から第Ⅳ図までを概観してみる。

長子についてみると、4年生男子④、4年生女子⑤のように、(L)グループに長子が多い場合もあるが、全体としては、④・⑤いずれにおいても、どちらかといえば、長子は(S)グループに多い。

中間子についてみると、④・⑤いずれにおいても、中間子は、どちらかといえば、(L)グループに多い。

末子についてみると、母親が勤めていない家庭では、どちらかといえば、男女ともに(S)グループに多く、勤めている家庭では、女子は(S)グループに多く、男子は(L)グループに多い。

一人子は標本数が少なく、資料としての価値がないと考える。



2) 実践意識のずれと兄弟関係

母子間の実践意識のずれに基づいて構成された (S)・(L) それぞれのグループについて /) と同様の集計を行ない、まとめたのが上の第5図から第8図である。

長子についてみると、4年男子②を除き、長子は (S) グループに多い。

中間子についてみると、母親が勤めている場合は (S) グループに多く、母親が家庭にいる場合、男子は (L) グループに多く、女子は (S) グループに多い。

末子についてみると、だいたい末子は（Ⅰ）グループに多く、この傾向は母親が勤めている場合に著しい。

一人子については標本数が少なく、したがって、ここでは考察の対象とはしない。

3) まとめと考察

長子についてみると、規範意識と実践意識により必ずしも傾向は一致しないが、どちらかといえば長子は、母親の職業の有無にかかわらず、母子間の道徳性のずれが少ないものが多いとみることができる。これは、長子は、出生第一位ということから、暖かい愛情のもとに指導的地位を与えられ、「よい行為」が期待されており、また、年少児の行動に対して責任をもたされているからであると考えられる。しかし、反面このように、お兄さん扱いされ過ぎる長子は弟妹に対する嫉妬心・憎悪感・優越感、支配性などの保守的専制的傾向・あるいは、小心翼翼・臆病・苦勞性などの退屈的な傾向を示す場合もありこれが母親との間のずれを大きくすることもある。これが、長子を（Ⅰ）グループに存在させる理由の一つとも考えられる。

中間子についてみると、どちらかといえば、中間子は母親との間のずれが大きいものが多いが、母親が勤めている家庭では、中間子は母親との間の実践意識のずれが小さいものも多く、なかなか複雑な傾向を示している。これは中間子の特殊の立場をあらわしているものと考えられる。すなわち、中間子は、兄姉や弟妹にはさまれて、自己の存在を主張する方法としてとる態度は、第一に長子に追いつき、これに打勝つために自らを強力に前方におしやることであり、第二の道は年長の同胞を批評しおとしめることによって、対等の地位に立とうとする行き方であり、第三の道は弟妹をいじめたり、また反対にきわめてやさしく面倒をみるとによって年少の同胞の組に入る行き方である。一般に、中間子は時には向うみずで負けん気といわれ、時には劣等感をもち陰険といわれ、時には暴れん坊で弱い者いじめといわれ、また時には内気で思いやりがあるなどといわれるのは、上に述べたいろいろな場合に対応するものであろう。このような中間子の複雑かつ微妙な立場が、母子間のずれを時には大きくし、時には小さくしていると考えられる。

末子についてみると、実践意識では母子間のずれが大きいものが多い。一般に、末子に対する親の態度には、いつまでも赤ん坊あつかいを続ける傾向がみられる。したがって、しつけや訓練が忘れられがちであり、愛情の王座を退位させられることもない。このような過度の愛情と保護が、末子を増長させ、いろいろな問題を生ぜしめる原因となる。末子はいつまでも安易な依存的生活に甘え、自我の確立しない自制心や独立心のない人間になりやすい。したがって、末子と母親とは、実践意識のずれが大きくなることが多いのであろう。

一般に一人子は多くの点でほかの児童とは異なった特徴をもち、教育上や日常生活上の問題児になりやすいといわれている。とくに、情意的傾向の問題になると問題行動が多く、特に注目されるのは、一人子の情緒傾向の両極性である。しかし、この調査では標本数が少なく、母子間の道徳性のずれとの関係を検討できる資料とはならなかった。

以上は、子どもの出生順位に焦点をおいて、母子間の道徳性のずれを考察したわけであるが、ここでは、出生順位により特にきわだった傾向は認められないといえよう。それは、ここでの考察は、標本数が少ないため、兄弟の数や性的構成、さらには、家庭の社会的経済的

文化的背景などの要因を無視した、ごく大まかな考察であるからであろう。出生順位と母子間の道徳性のずれとの間には、どのような相関があるかを追求する場合、前述のいろいろの要因を考慮するとともに、さらに母子関係の様態もあわせ考え、全体的な関連考察を試みなければならぬ。しかし、これには非常に多くの標本を必要とし、この調査においては、不可能であった。

次に参考までに、母親と長子、中間子、末子、一人子との間のそれぞれの母子関係の様態をのせておく。下の図表（親子関係診断テストによって得たパーセンタイルを平均した数表）によれば、母子関係の様態は学年・性別・母親の職業の有無により、かなり異なり、長子、中間子、末子、一人子それぞれに特有な傾向は認められない。これもまた、兄弟数、性的構成、家庭の社会的経済的文化的背景を考慮しなければならないことをあらわしている。

			消 極	積 極	厳 格	期 待	干 渉	不 安	溺 愛	盲 従	矛 盾	不 一 致
母親が動 めてい る家庭	4 年女子	一人子	79.7	63.5	69.7	84.7	81.0	73.7	58.5	57.5	53.7	60.0
		長子	46.6	48.3	55.0	51.6	60.8	55.8	65.0	63.3	63.1	61.5
		末子	44.2	53.1	56.4	55.7	67.6	61.7	58.1	63.1	64.3	59.6
		中間子	40.0	55.2	54.8	48.9	69.8	66.2	51.0	61.1	57.7	51.2
	4 年男子	一人子	25	50	55	35	35	10	90	99	45	99
		長子	32.7	50	40.5	28.8	48.8	61.6	56.1	57.2	52	55.5
		末子	41.0	34.6	41.7	40.0	56.4	53.9	50.7	65.0	53.2	54.1
		中間子	23	47	37	44	56.8	55	61.8	45	29	16
	6 年女子	一人子	15	7	35	25	50	37.5	20	37.5	50	30
		長子	34.1	74	62.5	70.8	59.1	75	55	73.3	64.8	55
		末子	43	55.5	58.9	62.6	71.9	70.6	71.5	73.7	51.8	61.3
		中間子	36.7	61.2	53.0	70.9	84.6	76.3	65.5	74.3	62.5	49.3
	6 年男子	一人子	45	72.5	97	77.5	74.5	80	47.5	57.5	84.5	72
		長子	41.5	60.5	64.5	75.3	71	84.5	73.5	81.4	64.9	56.8
		末子	38.7	68.1	60	66.8	76.1	80.5	69.1	76.1	68	65.7
		中間子	47.8	67.6	66.2	57.5	76.2	76.2	66.9	65.2	65.1	68
母親が動 めてい ない家庭	4 年女子	一人子	65.8	68.0	64.8	49.4	64.0	48.0	48.0	39.0	56.8	73.6
		長子	52.2	68.4	48.1	50.7	54.0	45.2	38.8	43.8	58.6	59.7
		末子	51.2	56.7	50.6	53.1	65.3	57.9	52.3	57.1	55.7	56.8
		中間子	58.7	71.6	76.5	68.9	72.6	71.6	64.3	62.6	62.6	61.5
	4 年男子	一人子	20	26.6	35	10	50	21.6	55	80	53	46
		長子	36.2	36.3	31.3	29.5	42.6	53.0	63.9	80	51.1	51.1
		末子	37.8	42.7	49.7	46.1	59.5	57.3	69.6	70.4	54.3	62
		中間子	28.0	27.1	31.1	24.3	41.1	28.7	65.1	52.9	36.4	54.2
	6 年女子	一人子	40	41.2	56	61	77.5	85	79.5	77.2	62.2	70
		長子	52.9	57.3	65.5	69.7	72.4	74.6	72.3	75.8	67.0	57.1
		末子	60.5	59.3	55.8	61.7	62.5	60.1	65.4	69	72	50.1
		中間子	46.2	49.3	57.6	66.7	72.7	79	75.1	75.5	55.8	53.9
	6 年男子	一人子	43.7	51.2	35	38.7	50	57.2	53.7	63.7	52.5	41
		長子	50	56	50	57	63	56	62	74	60	56
		末子	49	61	67	72	67	75	67	69	66	64
		中間子	50.2	57.3	55.2	58.3	63.3	65.7	52.0	70.1	60.4	53.9

Ⅶ む す び

母子関係と子どもの道徳性という問題は非常に大きな問題であり、親子関係診断テスト、道徳性テストなどに基づく統計的处理結果だけで、その全貌を明らかにすることは不可能に近い。しかしながら、この調査研究により、子どもの道徳性の高揚するために効果的かつ促進的な望ましい母子関係のあり方の一面については、その概貌をとらえ得たと信じている。ここでは、この調査研究によって得られた結果について、2.3の考察を試みるとともに、今後解決を要する問題点にこどももふれながらむすびとしたい。

1) 子どもの道徳性を啓培するために、母親についてまず問題にしなければならないのは、母親によって示される道徳的行動の型である。この行動の型は、行儀作法のような感覚運動的のものから、ものの考え方、価値への態度のような内面的なものにわたるものであり、道徳内容からみれば基本的行動様式、個人としての道徳から社会成員としての道徳にわたるものである。子どもはその家庭に生まれおちるやいなや、母親やその他の家族の人々の行動の型を学習し、これによって、子どもは家庭人となると同時に社会人ともなっていくものである。この学習の過程は行動的学習であり、経験的学習であろう。この意味において望ましい道徳性の啓培の面からいえば、子どもの心のよりどころとなる母親の行動の型が低劣なものでなく、道徳的に高い価値のあるものであることが必要であることは当然のことであり、この調査結果もこれを明瞭に裏づけている。しかし、母親の道徳的行動の型は、母親の個性的なものにも決定されようが同時に、その家庭を包む社会によっても規定されているのであり、ここに教育の関与する重要な面があると考ええる。

2) 子どもの道徳性を啓培するために、母親について、次に問題にしなければならないのは、母親と子どもとの感情の交流関係、すなわち、母子間の情緒力学であろう。母親の意図どおりに子どもに望ましい道徳的価値観や心情を育て、道徳実践として具現させるためには、母親の高い道徳性が必要とされるばかりでなく、望ましい母子関係が成立し、子どもが情緒的に安定感を心得ていることが要求されるということである。

情緒は欲求がいかに満たされているか、あるいは阻止されているかの関係を反映するものとして現われる。こんにちの精神衛生は、情緒の安定性、不安定性を重要な問題としている。子どもにとって満たされるべき基本的欲求として、愛情、独立、成就、社会的承認などへの欲求があげられるが、これらが母親との関係において適当に満たされていかなければならない。

この調査においては、子どもの道徳性の啓培にとって、母親による愛情がいかに大切であるか、また愛情の過多と欠乏がいかに子どもの道徳性の啓培に妨げになるかが明らかとなった。すなわち子どもの愛情への欲求が母親によって適切に満たされていることが、子どもに情緒の安定感をもたらし、道徳性を啓培する基盤となっているとみることができる。

しかし、ここで注意しなくてはならないことは、人間関係における情緒の発生はきわめて微妙であって、合理的な意識だけでなく、非合理的な下層に深く根をおろしていることである。ゆがんだ心は、この下層的な情緒の目をもって相手の言動をとらえる。また、子どもは非常に鋭敏に、大人の心の下層に秘められている感情をかぎつける。このような人間関係における情

緒は複雑で合理性をこえた面をもっている。この意味において、とくに家庭では人間の自然的感情が発露し、相互に影響していくのであるからこの点の配慮をとくに必要とするであろう。

情緒はまた、きわめて早く条件化し固着する傾向がある。一回の経験であっても心の底に不快なしこりとして残り生きつづけることがある。このようなしこりの内容が、たとえば、母親の偏愛によって生じた反抗、憎しみ、しつと、復習などの心である場合、子どもの道徳性の啓培に好ましくない影響力をもつことは当然であろう。しかも、このようなしこりは自分の意志ではとり除くことができないほど強固になっていくことを考えあわせると、教育面からおおいに関心をもたれるべき対象であろう。

教育的な面から考えると、どの情緒もまったく同じ価値であるとはいえない。愛、感謝などは価値高い情緒の形態であると考えられるが、教育的には、これらの高い情緒の形成が家庭内の、とくに母子関係をとおして形成されていかなければならない。これは、子どもの道徳性の啓培の基盤となるばかりでなく、家庭における教育的機能の本質を形成するものであろう。

- 3) 母子関係に関連してふれたいことは、教師子ども関係である。子どもの道徳性を啓培するために、望ましい母子関係が成立していることが必要とされると同様に、学校における道徳教育の問題も、子どもと教師との人間関係に発し、そこに帰するものが多いといえることができる。一般でも、道徳教育の成果は教師と子どもとの関係いかんによると言われることがある。たしかに、教師と子どもとの人間関係を整えることが、子どもの道徳性が啓培されていく基盤をつくるものであろうが、これが経験的に、ばくせんと語られているだけで、具体的にどのような関係が、子どもの道徳性が啓培されていく心情的基盤をつくっているか実証的な追求はなされていない。このような追求がなされた時に、教師子ども人間関係のあり方が道徳教育の方法論の領域のなかにはいってくるであろう。

なお、この調査研究から類推すると、教育的な基盤の人間関係もまた、愛によって結ばれていく関係であろう。ここで愛とは何かということが問題になる。道徳教育の方法論という観点からいえば、自己の安定感をささえ得るものであり、自発的に自己を卒直に考え現実に当面する力を得させるものであり、価値にむかって自己を生かし、また努力していく決意を可能にするものであろう。要するに教師と子どもは、社会的役割、位置、機能のような枠組のなかで関係しあうだけでなく、おたがいがこれらの枠組をつき破って、人間として平等の立場に立ち、そこで相手の価値を認め、成長を信ずる関係でなければならぬと考える。このように、母子間における望ましい人間関係（愛情の関係）と同じ関係を取りながら、とくに教育的という時には、信念と信頼の関係ということができるのではなかろうか。

- 4) 最後に述べたいことは、調査研究の方法上の問題である。ここでは、母子関係に焦点をあわせて、子どもの道徳性をみてきたが、これには次のような未解決の問題が残されている。

- ・ 母親の子どもへの影響力は、家庭における母親の地位、役割などによっても異なる。すなわち、母親をめぐるさまざまな要素がからみあい、働きあって、それぞれの要素がたがいに構造連関をなしていると考えられる。この構造連関を捉えるようにしなければならない。
- ・ 母親の影響力を追求する場合単にそれを受けとる子どもの側の心理的環境のあり方をとらえるばかりでなく、母親の心の動きも調査しなければならない。
- ・ 母親のもつ人間形成力は、単に母親個人がもつものではなく、その家庭を構成している人々

や社会につらなり，また，その社会の歴史に規定されているのであって，母親のもつ人間形成力は，同時に，社会の形成力を含んでいることを留意のうえにおいて，探究をすすめなくてはならない。

この調査研究報告の稿を閉じるにあたり，この調査に協力していただいた学校の先生方ならびに母親の皆様に深い感謝の意を表します。

なお，この調査研究を直接担当したのは，小川敏通，堺嘉治の二名で，この原稿を執筆したのは堺嘉治である。

参 考 文 献

- | | | |
|-----------|---------------------------|---------|
| 沢 田 慶 輔 | 相談心理学 | 朝倉書店 |
| 品川 不二郎他 | 教育相談の技術 | 日本文化科学社 |
| 戸 川 行男他 | 性格心理学講座（全5巻） | 金子書房 |
| 篠 原 助 市 | 家庭教育の話 | 宝文館 |
| 黒 丸 正四郎 | 子供の精神障害 | 創元社 |
| 津 留 宏他 | 親子関係 | 福村書店 |
| 長 田 新他 | 現代道德教育講座（全5巻） | 岩崎書店 |
| 青 木 誠四郎 | 道德性の発達と教育 | 朝倉書店 |
| 正 木 正 | 道德教育の研究 | 金子書房 |
| 新潟県立教育研究所 | 児童生徒・父母・教師の道德的価値観（紀要第23集） | |
| ” | 青少年の生き方とその指導（紀要第25集） | |
| ” | 子どものための教育相談（紀要第33集） | |

第1表 規範意識のずれと母子関係

④ 4年生男子

類 型		消	積	厳	期	干	不	溺	盲	矛	不	消	積	厳	期	干	不	溺	盲	矛	不
		拒	拒	格	待	渉	安	愛	従	盾	致	拒	拒	格	待	渉	安	愛	従	盾	致
L ゲ ル ー ブ	パーセンタイル	33	35	33	26	45	40	61	69	43	55	52	65	54	53	60	51	45	50	59	59
	危険な母子関係 実数	13	16	12	18	10	13	3	3	9	6	4	5	7	6	5	9	8	7	3	2
	危険な母子関係 %	46	57	43	64	36	46	11	11	32	21	14	17	24	21	17	31	28	24	10	7
	準危険な母子関係 実数	5	4	6	4	8	4	8	3	5	4	13	8	6	11	5	7	8	7	7	7
	準危険な母子関係 %	18	14	21	14	29	14	29	11	18	14	45	28	21	38	17	24	28	24	24	24
	普通の母子関係 実数	10	8	10	6	10	11	17	12	14	18	12	16	16	12	19	13	13	15	19	20
S ゲ ル ー ブ	普通の母子関係 %	36	29	36	21	36	39	61	43	50	64	42	55	55	42	66	45	45	52	66	69
	パーセンタイル	34	37	46	46	51	51	72	73	56	63	57	68	58	57	67	61	56	56	58	59
	危険な母子関係 実数	10	9	6	8	7	6	1	2	4	2	5	1	1	4	1	6	3	4	4	0
	危険な母子関係 %	37	33	22	30	26	22	4	7	15	7	17	3	3	14	3	21	10	14	14	0
	準危険な母子関係 実数	11	11	8	4	5	8	2	3	7	6	8	5	10	5	5	5	9	10	6	11
	準危険な母子関係 %	41	41	30	15	19	30	7	11	26	22	28	17	34	17	17	17	31	34	21	38
ブ	普通の母子関係 実数	6	7	13	15	15	13	24	22	16	19	16	23	18	20	23	18	17	15	19	18
	普通の母子関係 %	22	26	48	56	56	48	89	81	59	70	55	80	62	69	80	62	59	52	66	62

L (標本28) S (標本27)

第2表 規範意識のずれと母子関係

④ 4年生女子

L (標本29) S (標本29)

第3表 規範意識のずれと母子関係

④ 6年生男子

類 型		消	積	厳	期	干	不	溺	盲	矛	不	消	積	厳	期	干	不	溺	盲	矛	不
		拒	拒	格	待	渉	安	愛	従	盾	致	拒	拒	格	待	渉	安	愛	従	盾	致
L ゲ ル ー ブ	パーセンタイル	48	58	61	69	72	73	61	80	64	63	45	45	51	57	60	70	67	67	57	50
	危険な母子関係 実	8	6	6	3	1	1	4	1	3	3	7	14	9	6	2	4	3	3	2	6
	危険な母子関係 %	24	19	19	9	3	3	13	3	9	9	19	38	24	16	5	11	8	8	5	16
	準危険な母子関係 実	11	12	6	6	8	2	9	4	8	5	16	10	7	9	11	4	4	6	15	12
	準危険な母子関係 %	34	38	19	19	25	6	28	13	25	16	43	27	19	24	30	11	11	16	41	32
	普通の母子関係 実	13	14	20	23	23	29	19	27	21	24	14	13	21	22	24	29	30	28	20	19
S ゲ ル ー ブ	普通の母子関係 %	41	44	63	72	72	91	59	84	66	75	38	35	57	59	65	78	81	76	54	51
	パーセンタイル	51	64	52	54	56	57	58	62	61	52	59	70	69	75	73	73	69	81	65	60
	危険な母子関係 実	8	7	6	8	5	4	8	5	3	5	2	3	1	3	1	1	0	1	3	2
	危険な母子関係 %	24	21	18	24	15	12	24	15	9	15	5	8	3	8	3	3	0	3	8	5
	準危険な母子関係 実	8	4	10	4	10	9	3	7	8	9	14	3	6	3	1	5	7	1	3	8
	準危険な母子関係 %	24	12	3	12	3	27	9	21	24	27	38	8	16	8	3	14	19	3	8	22
ブ	普通の母子関係 実	17	21	17	21	18	20	22	21	22	19	21	31	30	31	35	31	30	35	31	27
	普通の母子関係 %	52	67	52	64	55	61	67	64	67	58	57	84	81	84	95	84	81	95	84	73

L (標本数32) S (標本数33)

L (標本数37) S (標本数37)

第5表 規範意識のずれと母子関係

㊦ 4年生男子

第6表 規範意識のずれと母子関係

㊦ 4年生女子

類 型		消 積 厳 期 干 不 溺 盲 矛 不 一																				
		拒	拒	格	待	渉	安	愛	従	盾	致	拒	拒	格	待	渉	安	愛	従	盾	致	
(L) ゲ ル ー ブ	パーセンタイル	31	41	43	36	61	63	55	62	47	51	40	50	59	54	69	61	56	61	56	55	
	危	実	7	6	5	3	2	4	3	2	4	3	7	7	1	2	1	2	3	3	2	4
		%	47	40	33	20	13	27	20	13	27	20	32	32	5	9	5	9	14	14	9	18
	準	実	5	5	2	6	3	0	3	3	4	4	8	8	8	7	4	6	3	2	8	3
		%	33	33	13	40	20	0	20	20	27	27	36	36	36	32	18	27	14	9	36	14
	普	実	3	4	8	6	10	11	9	10	7	8	7	7	13	13	17	14	16	17	12	15
%		20	27	53	40	67	73	60	67	47	53	32	32	59	59	77	64	73	77	55	68	
(S) ゲ ル ー ブ	パーセンタイル	35	42	38	26	44	46	54	58	49	45	51	57	51	56	67	64	56	61	64	56	
	危	実	5	5	5	5	2	3	3	3	3	3	4	2	4	4	2	3	1	3	2	0
		%	36	36	36	36	14	21	21	21	21	21	18	9	18	18	9	14	5	14	9	0
	準	実	6	2	3	7	5	4	2	1	5	6	8	6	6	3	1	3	8	5	4	9
		%	43	14	21	50	36	29	15	8	36	43	36	27	27	14	5	14	36	23	18	41
	普	実	3	7	6	2	7	7	9	10	6	5	10	14	12	15	19	16	13	14	16	13
%		21	50	43	15	50	50	64	71	43	36	45	64	55	68	86	73	59	64	73	59	

L (標本数 / 5) S (標本数 / 4)

L (標本数 2.2) S (標本数 2.2)

第7表 規範意識のずれと母子関係

㊦ 6年生男子

第8表 規範意識のずれと母子関係

㊦ 6年生女子

類 型		消 積 厳 期 干 不 溺 盲 矛 不 一										消 積 厳 期 干 不 溺 盲 矛 不 一										
		拒	拒	格	待	渉	安	愛	従	盾	致	拒	拒	格	待	渉	安	愛	従	盾	致	
(L) グ ル ー ブ	パーセンタイル		33	63	65	68	77	85	72	74	70	64	39	50	47	60	65	67	62	69	57	42
	危	実	8	2	2	1	1	0	0	1	0	2	4	8	6	3	2	2	1	1	1	5
		%	44	11	11	6	6	0	0	6	0	11	21	42	32	16	11	11	5	5	5	26
	準	実	5	5	1	5	1	0	2	2	3	1	9	3	2	5	4	4	6	4	7	7
		%	28	28	6	28	6	0	11	11	17	6	47	16	11	26	21	21	32	21	37	37
	普	実	5	11	15	12	16	18	16	17	15	15	6	8	11	11	13	13	12	14	11	7
		%	28	61	83	67	89	100	89	94	83	83	32	42	58	58	68	68	63	74	58	37
(S) グ ル ー ブ	パーセンタイル		53	68	66	63	71	74	63	68	65	65	38	65	63	70	74	75	71	72	64	62
	危	実	1	1	1	3	0	1	0	1	1	0	3	0	1				1			
		%	6	6	6	17	0	6	0	6	6	0	16	0	5	0	0	0	5	0	0	
	準	実	8	2	4	2	2	2	5	5	3	4	13	4	4	2	1	4	2	4	5	5
		%	44	11	22	11	11	11	28	28	17	22	68	21	21	11	52	11	21	26	26	
	普	実	9	15	13	13	16	15	13	12	14	14	3	15	14	17	18	15	17	14	14	14
		%	50	83	72	72	89	83	72	67	78	78	16	79	74	89	95	79	89	74	74	74

L (標本数 / 8) S (標本数 / 8)

L (標本数 / 9) S (標本数 / 9)

Ⅷ 資 料

第 9 表 実践意識のずれと母子関係

④ 4年生男子

類 型		消 積 厳 期 干 不 溺 盲 矛 不 消 積 厳 期 干 不 溺 盲 矛 不	拒 拒 格 待 涉 安 愛 従 盾 致 拒 拒 格 待 涉 安 愛 従 盾 致																			
(L)	パーセンタイル	31	38	32	29	43	41	61	68	45	58	54	64	53	56	64	57	50	51	53	57	
	危	実	14	14	12	14	11	13	3	3	10	6	6	4	4	6	3	8	8	7	2	2
		%	50	50	43	50	39	46	11	11	36	21	21	14	14	21	10	28	28	24	7	7
	準	実	7	7	7	9	5	6	5	4	4	5	6	7	10	9	5	6	7	7	6	10
		%	25	25	25	32	18	21	18	14	14	18	21	24	34	31	17	21	24	24	21	34
	普	実	7	7	9	5	12	9	20	21	14	17	17	18	15	14	21	15	14	15	21	17
		%	25	25	32	18	43	32	71	75	50	61	59	62	52	48	72	52	48	52	72	59
パーセンタイル	35	39	47	43	51	51	72	74	55	60	55	65	60	53	65	57	51	55	53	61		
(S)	危	実	9	10	6	13	5	7	1	2	3	3	3	3	1	4	3	5	4	4	5	1
		%	33	37	22	48	19	26	4	7	11	11	10	10	3	14	10	17	14	14	17	3
	準	実	9	7	8	2	6	6	5	2	8	5	13	6	9	8	5	8	9	10	7	8
		%	33	26	30	7	22	22	19	7	30	19	45	21	31	28	17	28	31	34	24	28
	普	実	9	10	13	12	16	14	21	23	16	19	13	20	19	17	21	16	16	15	17	20
		%	33	37	48	44	59	52	78	85	59	70	45	69	66	59	72	55	55	52	59	69

L (標本数 28) S (標本数 27)

L (標本数 29) S (標本数 29)

第 11 表 実践意識のずれと母子関係

④ 6年生男子

類 型		消 拒	積 拒	厳 格	期 待	干 渉	不 安	溺 愛	盲 従	矛 盾	不 一 致	消 拒	積 拒	厳 格	期 待	干 渉	不 安	溺 愛	盲 従	矛 盾	不 一 致	
(L)	パーセンタイル	46	58	57	63	65	66	60	71	60	55	46	52	50	55	59	68	66	67	62	51	
	危	実	8	7	6	5	3	4	6	3	3	4	6	9	7	6	3	4	2	3	3	6
		%	25	22	19	16	9	13	19	9	9	13	16	24	19	16	8	11	5	8	8	16
	準	実	12	9	5	6	7	4	5	4	9	6	17	13	9	11	10	4	8	6	10	12
		%	38	28	16	19	22	13	16	13	28	19	46	35	24	30	27	11	22	16	27	32
	普	実	12	16	21	21	22	24	21	25	20	22	14	15	21	20	24	29	27	28	24	19
%		38	50	66	66	69	75	66	78	63	68	38	41	57	54	65	78	73	76	65	51	
(S)	パーセンタイル	52	57	55	59	62	64	60	71	66	59	59	63	69	79	74	75	75	81	70	60	
	危	実	8	6	5	6	3	1	4	3	3	3	3	3	1	2	1	1	1	2	1	
		%	24	18	15	18	9	3	12	9	9	9	8	8	3	5	3	3	3	5	3	
	準	実	7	4	10	4	5	7	8	7	7	9	13	7	7	2	3	6	2	2	9	10
		%	21	12	30	12	15	21	24	21	21	27	35	19	19	5	8	16	5	5	24	27
	普	実	18	23	18	23	25	25	21	23	23	21	21	27	29	33	33	30	34	34	26	26
%		55	70	55	70	76	76	64	70	70	64	57	73	78	89	89	81	92	92	70	70	

L (標本数 32) S (標本数 33)

L (標本数 37) S (標本数 37)

第13表 実践意識のずれと母子関係

㊦ 4年生男子

類 型		消 拒	積 拒	厳 格	期 待	干 渉	不 安	高 愛	盲 従	矛 盾	不 一 致	消 拒	積 拒	厳 格	期 待	干 渉	不 安	高 愛	盲 従	矛 盾	不 一 致	
(L)	パーセンタイル	29	37	36	37	54	56	53	60	43	47	45	58	59	58	64	68	55	61	58	54	
	危	実	6	8	6	5	2	4	4	3	4	3	6	6	2	2	1	2	3	2	2	3
		%	40	53	40	33	13	27	27	20	27	22	77	9	9	5	9	14	9	9	14	
	準	実	7	3	3	5	6	2	1	2	5	6	8	6	4	8	4	1	5	5	5	
		%	47	20	20	33	40	13	7	13	33	40	37	27	18	37	18	18	27	22	22	22
	普	実	2	4	6	5	7	9	10	10	6	6	8	10	16	12	17	16	13	15	15	14
%		13	27	40	33	47	60	67	67	20	20	36	45	73	55	77	73	59	68	68	64	
(S)	パーセンタイル	32	47	46	36	53	53	57	60	53	49	49	59	54	52	76	62	56	62	62	57	
	危	実	5	4	5	4	2	4	0	3	3	2	5	3	3	4	2	3	1	4	2	1
		%	36	29	36	29	14	29	0	21	21	14	23	14	14	18	9	14	5	18	1	5
	準	実	5	1	1	5	4	1	5	1	4	5	8	7	10	4	1	5	6	2	7	7
		%	36	7	7	36	29	7	36	7	29	36	37	31	45	18	5	22	27	9	31	31
	普	実	4	9	8	5	8	9	9	10	7	7	9	12	9	14	19	14	15	16	13	14
%		29	64	57	36	57	64	64	71	50	50	41	55	41	64	86	64	68	73	59	64	

L (標本数/5) S (標本数/4)

L (標本数22) S (標本数22)

第15表 実践意識のずれと母子関係

㊦ 6年生男子

類 型		消 拒	積 拒	厳 格	期 待	干 渉	不 安	高 愛	盲 従	矛 盾	不 一 致	消 拒	積 拒	厳 格	期 待	干 渉	不 安	高 愛	盲 従	矛 盾	不 一 致	
(L) ケ ル 1 ブ	パーセンタイル	37	62	61	59	66	81	65	66	69	59	37	48	54	53	76	76	72	71	59	49	
	危	実	5	3	2	2	1	0	1	2	0	3	4	8	4	2	1	0	1	1	0	3
		%	28	17	11	11	6	0	6	11	0	17	21	42	21	11	5	0	5	5	0	16
	準	実	8	4	3	7	5	0	4	4	3	3	11	3	2	5	2	4	2	3	7	6
		%	44	22	17	39	28	0	22	22	17	17	58	16	11	26	11	21	11	16	37	32
	普	実	5	11	13	9	12	18	13	12	15	12	4	8	13	12	16	15	16	15	12	10
%		28	61	72	50	67	40	72	67	83	67	21	42	68	63	84	79	84	79	63	53	
(S) ケ ル 1 ブ	パーセンタイル	50	69	70	71	83	78	71	76	64	70	43	67	57	67	63	67	60	72	61	54	
	危	実	4	0	1	2	0	1	0	0	1	0	3	1	0	1	1	2	1	1	1	2
		%	22	0	6	11	0	6	0	0	6	0	16	5	0	5	5	11	5	5	5	11
	準	実	5	3	2	1	1	2	2	3	3	1	11	2	6	2	2	4	5	5	5	6
		%	28	17	11	6	6	11	11	17	17	6	58	11	32	11	11	21	26	26	26	32
	普	実	9	15	15	15	17	15	16	15	14	17	5	16	13	16	16	13	13	13	13	11
%		50	83	81	83	94	83	89	83	78	94	26	84	68	84	84	68	68	68	68	58	

L (標本数/8) S (標本数/8)

L (標本数/9) S (標本数/9)

第 7 表 規範意識のずれと母子関係

道徳性		道徳内容	母親の職業の有無		母親が勤めていない家庭				母親が勤めている家庭																														
			2 年性別		4 男	4 女	6 男	6 女	4 男	4 女	6 男	6 女																											
			(L)	(S)																																			
規範意識	実践意識	基本	(L)	(S)	(L)	(S)	(L)	(S)	(L)	(S)	(L)	(S)	(L)	(S)																									
			グ	グ	グ	グ	グ	グ	グ	グ	グ	グ	グ	グ																									
			ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル																									
			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1																									
子	ど	も	の	母	親	基	本	的	行	動	様	式	91	93																									
															95	96	87	87	84	90	85	92	93	94	86	88	86	84											
															84	91	94	96	88	90	89	92	80	88	85	92	90	91	91	89									
															78	88	86	85	83	87	83	86	71	83	83	86	85	84	83	86									
子	ど	も	の	母	親	合	計	83	90	92	93	86	88	86	90	78	87	86	91	87	88	87	87																
																								73	79	79	83	69	70	68	70	75	73	68	77	58	63	68	68
																								69	76	78	86	75	72	73	75	73	73	75	74	69	70	68	73
																								66	68	71	75	73	74	70	76	61	71	69	73	69	71	68	74
子	ど	も	の	母	親	合	計	69	74	76	82	73	73	71	74	70	72	72	74	67	69	68	73																
																								84	89	83	93	86	89	89	88	78	86	84	92	86	88	84	88
																								87	90	85	93	83	90	86	89	84	90	85	91	86	88	83	89
																								81	86	81	85	78	84	79	88	76	83	76	85	81	86	78	86
子	ど	も	の	母	親	合	計	84	89	83	92	82	88	85	89	80	87	82	89	84	88	82	88																
																								71	74	85	81	73	76	77	78	71	64	78	75	73	75	71	71
																								73	77	73	84	75	78	77	76	74	74	75	75	78	79	76	78
																								63	78	71	80	74	76	74	78	68	72	73	74	76	79	71	76
子	ど	も	の	母	親	合	計	69	76	75	82	74	77	76	77	71	71	75	76	76	78	73	76																

第18表 実践意識のずれと母子関係

母親の職業の有無 2年性別 道徳性 道徳内容			母親が勤めていない家庭				母親が勤めている家庭				
			女 男	女 女	男 男	男 女	女 男	女 女	男 男	男 女	
			(L) (S)	(L) (S)	(L) (S)	(L) (S)	(L) (S)	(L) (S)	(L) (S)	(L) (S)	(L) (S)
			ググ ルル 11 ブブ	ググ ルル 11 ブブ	ググ ルル 11 ブブ	ググ ルル 11 ブブ	ググ ルル 11 ブブ	ググ ルル 11 ブブ	ググ ルル 11 ブブ	ググ ルル 11 ブブ	
子 と も	規範意識	基本的行動様式	91 93	94 98	85 88	87 88	89 88	94 93	84 86	79 86	
		個人としての道徳	85 89	93 96	88 90	90 90	83 85	88 90	91 90	86 90	
		社会成員としての道徳	80 83	83 87	83 88	84 85	78 76	86 83	86 86	82 84	
		合 計	85 88	90 94	86 89	87 88	83 83	88 88	88 88	83 87	
母	実践意識	基本的行動様式	73 78	76 88	68 71	66 72	71 73	69 76	59 61	56 63	
		個人としての道徳	65 80	78 86	72 77	68 79	69 76	70 78	58 76	55 72	
		社会成員としての道徳	57 76	70 74	70 76	69 78	64 73	63 76	66 75	62 71	
		合 計	64 78	75 83	70 75	68 77	68 74	67 77	61 72	58 70	
親	規範意識	基本的行動様式	87 87	86 91	87 88	88 88	86 80	87 90	84 86	80 86	
		個人としての道徳	87 90	86 91	85 88	88 87	88 86	85 91	88 87	83 87	
		社会成員としての道徳	81 86	84 81	79 83	84 84	81 78	78 83	87 80	83 79	
		合 計	85 88	85 88	84 86	87 87	85 82	83 88	87 84	82 84	
親	実践意識	基本的行動様式	69 76	67 83	76 73	75 75	61 75	75 79	73 75	72 71	
		個人としての道徳	71 78	72 85	79 76	75 78	65 74	74 78	78 83	70 79	
		社会成員としての道徳	66 74	73 78	73 78	74 78	64 73	73 74	74 80	71 76	
		合 計	69 76	71 83	77 75	75 77	64 74	74 77	76 80	71 76	